

庄島侍屋敷遺跡

— 第 10 次発掘調査報告 —

平成 28（2016）年 12 月

久留米市教育委員会

庄島侍屋敷遺跡

－第 10 次発掘調査報告－

平成 28（2016）年 12 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、水や緑の豊かな自然に恵まれるとともに、交通の要衝に位置し、古来より筑後地方の中心都市として栄えてきました。近年も、これらの歴史や地域特性を活かし、福岡県第3の都市として発展してきましたが、少子・高齢化、高度情報化、エネルギー問題などの時代の潮流は、質的に深化、量的に拡大し、行政や市民、企業を取り巻く環境は常に変化しています。本市では、このような変化に対応するため、市民と行政がパートナーシップの理念の下に協働し、質の高い生活中心の都市づくりを目指しています。また、本市が誇る地域資源である「水と緑」を活かし、歴史が見えるまちを創り出すため、耳納山系の自然の保全や歴史風土の継承に取り組んでいます。

市内各地には次代に継承すべき貴重な歴史遺産が多数存在し、本書で報告する庄島侍屋敷遺跡もその一つで、共同住宅建設に先立つ発掘調査として、平成27年度に実施しました。発掘調査では、久留米藩の9代藩主である有馬頼徳が傾倒した柳原焼が初めて出土するなど、貴重な成果を挙げることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域の歴史解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年12月28日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち■■■■氏の委託を受けて実施した、庄島侍屋敷遺跡第10次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査は久留米市教育委員会が主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・大淵文子・中野ゆみが行った。また、遺物の実測および個別遺構図の浄書は、古賀和子が実施した。なお、土層図（1/10）は手測りで、遺構配置図と遺構番号図は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんcubic」で廣木が作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真はマミヤRB67を使用し、遺物写真はニコンD700を用いて廣木が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S D - 溝、S E - 井戸、S K - 土坑、S P - ピットを示す。
6. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面方位は座標北を示す。
7. 本調査の略記号はL S J - 010、調査番号は201510である。
8. 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。

口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位は cm である。（ ）内の数値は現存値を、[] 内の数値は復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997 年版）による。

登録番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 2 0 1 5 1 0 — 0 0 0 0 0 1

調査番号 登録番号
9. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
10. 本書の執筆・編集は、廣木が実施した。

本文目次

I. はじめに	1
i. 調査に至る経過	1
ii. 調査・報告書作成に係わる体制	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
i. 調査の目的と経過	4
ii. 検出遺構	7
iii. 出土遺物	21
IV. 総括	25
報告書抄録	巻末

插图目次

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)	3
第3図 延寶八年図 (1680年)	4
第4図 天保年間図 (1830～1844年)	4
第5図 明治二年図 (1869年)	4
第6図 庄島侍屋敷遺跡第10次調査遺構配置図 (1/150)	5
第7図 遺構番号図及び調査区分図 (1/150)	6
第8図 S D50・66 土層図 (1/20)	7
第9図 S E69・70・76 実測図 (1/40)	8
第10図 S K13 土層図、S K19・26・27 実測図 (S K13・26 : 1/40、その他 : 1/50)	9
第11図 S K36・38・41・43 実測図、S K40 土層図 (1/40)	12
第12図 S K45・46・49・52・53 実測図 (1/40)	14
第13図 S K54・56・57・60 実測図 (S K57・60 : 1/40、その他 : 1/50)	16
第14図 S K63・64・65・75・80 実測図 (1/40)	18
第15図 S K81・82・83・84・85・88 実測図 (S K88 : 1/50、その他 : 1/40)	20
第16図 S K90 実測図 (1/40)	21
第17図 遺物実測図 (1/4)	21

表目次

第1表 出土遺物観察表①	22
第2表 出土遺物観察表②	23

第3表 出土遺物観察表③	24
第4表 出土遺物観察表④	25

図版目次

図版1 (1) 東区全景 (西から)	(3) S K52 土層 (北から)
(2) 西区全景 (東から)	(4) S K52 完掘状況 (南から)
図版2 (1) S D50 土層 (南東から)	(5) S K53 土層 (北西から)
(2) S D50 完掘状況 (北から)	(6) S K53 完掘状況 (北東から)
(3) S D66 土層 (南から)	(7) S K54 土層 (南東から)
(4) S D66 完掘状況 (南から)	(8) S K54 完掘状況 (北東から)
(5) S E69 土層 (南西から)	図版7 (1) S K56 土層 (南西から)
(6) S E70 土層 (北東から)	(2) S K56 完掘状況 (西から)
(7) S E76 土層 (南から)	(3) S K57 土層 (南東から)
(8) S K13 土層 (南東から)	(4) S K57 完掘状況 (西から)
図版3 (1) S K13 掘削状況① (北西から)	(5) S K60 土層 (北西から)
(2) S K13 掘削状況② (南西から)	(6) S K60 完掘状況 (北西から)
(3) S K19 土層 (北西から)	(7) S K61 完掘状況 (東から)
(4) S K19 完掘状況 (南西から)	(8) S K63 土層 (南から)
(5) S K25 掘削状況 (北東から)	図版8 (1) S K63 完掘状況 (西から)
(6) S K26 土層 (北から)	(2) S K64 土層 (南から)
(7) S K26 完掘状況 (北西から)	(3) S K64 完掘状況 (東から)
(8) S K27 土層 (北から)	(4) S K65 完掘状況 (北から)
図版4 (1) S K27 完掘状況 (北東から)	(5) S K75 土層 (西から)
(2) S K29 完掘状況 (北西から)	(6) S K80 土層 (南から)
(3) S K30 完掘状況 (南西から)	(7) S K80 完掘状況 (南から)
(4) S K31 完掘状況 (南西から)	(8) S K81 完掘状況 (西から)
(5) S K34 土層 (南から)	図版9 (1) S K82 完掘状況 (東から)
(6) S K36 土層 (北東から)	(2) S K83 完掘状況 (東から)
(7) S K36 完掘状況 (西から)	(3) S K84 完掘状況 (南から)
(8) S K38 完掘状況 (南西から)	(4) S K85 土層 (北東から)
図版5 (1) S K39 完掘状況 (南東から)	(5) S K85 完掘状況 (南西から)
(2) S K40 上層土層 (南東から)	(6) S K88 完掘状況 (西から)
(3) S K40 下層土層 (北東から)	(7) S K90 土層 (北東から)
(4) S K40 掘削状況 (北東から)	(8) S K90 完掘状況 (南東から)
(5) S K41 完掘状況 (北から)	図版10 出土遺物①
(6) S K43 完掘状況 (南西から)	図版11 出土遺物②
(7) S K45 土層 (北から)	図版12 出土遺物③
(8) S K45 完掘状況 (西から)	図版13 出土遺物④
図版6 (1) S K46 完掘状況 (西から)	図版14 出土遺物⑤
(2) S K49 完掘状況 (北西から)	図版15 出土遺物⑥

I. はじめに

i. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成27年10月19日、[]氏より、久留米市荘島町17-54、-64、-65、-66における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。一帯は周知の遺跡である庄島侍屋敷遺跡に含まれ、事前を実施していた確認調査において、狭小な調査ながら、遺構を確認していた。また、西側隣接地では平成24年度に第9次調査を実施している。結果、近世の侍屋敷の境界溝をはじめ、井戸、土坑などを検出しており、対象地にも同時代の遺構が密に分布する可能性が高いことが想定された。以上のことから、開発対象地内の建物建設予定地部分について発掘調査が必要である旨を回答した。その後、協議を重ね、調査費用を原因者負担とし、平成27年10月30日に[]氏から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成27年12月7日に[]氏と久留米市は「庄島侍屋敷遺跡第10次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。

現地調査期間は、平成27年12月14日から平成28年3月14日までである。また、出土品整理・報告書作成作業は平成28年4月19日に「庄島侍屋敷遺跡第10次調査報告書作成委託契約書」を取り交わし、実施した。報告書作成期間は平成28年5月2日から12月28日までである。

ii. 調査・報告書作成に係わる体制

調査委託：[]

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部

部 長：野田秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之（平成28年度）

次 長：竹村政高

文化財保護課

課 長：馬場博文（平成28年度）

園井正隆（平成27年度）

課長補佐：白木 守 山崎万里子

主 査：水原道範

事務主査：豊福早苗（庶務担当） 塚本映子

調査担当：廣木 誠

整理担当：古賀和子

発掘調査臨時職員（平成27年度）

秋永 絹子・大坪 進・大淵 文子・川原 初美・國武 三歳・佐々木栄子・松尾 朱美

田中とし子・中野 ゆみ・溝口 輝男・森山美千代・柳 鈴子・山田 治代

発掘調査整理臨時職員（平成28年度）

原田奈瑠美

Ⅱ．位置と環境

庄島侍屋敷遺跡は久留米市街地の南西に位置し、JR久留米駅の南東700mに展開する。一帯は久留米市街地を東西に横断する「明治通り」を中心として、商工業施設やマンションが建ち並ぶ住宅地であるが、その基盤は江戸時代初期に開始された久留米城下町の築造に遡る。調査地の西方1.3kmには九州随一の大河である筑後川が流れ、有明海へと注ぐ。この筑後川は別名「一夜川」とも呼ばれたように幾度となく氾濫を繰り返し、大きく地形を改変させているが、本遺跡付近は低丘陵状を呈し、「島」の呼称が示すとおり水没することがなかったという。

久留米城の築城時期は確定できていないものの、天正15年（1587）には豊臣秀吉の九州国割によって小早川秀包が久留米城主として入城する。その後、毛利家が関ヶ原の戦いで西軍に加担して敗北すると、慶長6年（1601）に同合戦において功績のあった田中吉政が筑後国の国主として柳河城に入り、久留米城には次男の則政が入城することとなった。この頃には町屋の建設や交通網の整備に着手するなど、一定の城下町の建設がなされたようである。元和6年（1620）に田中家が改易されると、翌年には丹波福知山から有馬豊氏が久留米藩へ転封され、武家屋敷や町屋の建設、二ノ丸、三ノ丸・外郭の拡充整備に着手した。有馬氏は明治4年（1871）の廃藩置県まで11代250年にもわたって久留米藩を統治することとなった。

北西の筑後川に面して築かれた久留米城本丸は、二ノ丸・三ノ丸・外郭と4重の堀によって囲まれ、東に櫛原、西に京隈、南に庄島の侍屋敷を配す。また、侍屋敷の外側には寺社を建立することで防衛



- | 遺 跡 名 | |
|-------|----------|
| 1 | 調査地点 |
| 2 | 庄島侍屋敷遺跡 |
| 3 | 久留米城本丸 |
| 4 | 久留米城二ノ丸 |
| 5 | 久留米城三ノ丸 |
| 6 | 久留米城外郭遺跡 |
| 7 | 柳原 |
| 8 | 京隈侍屋敷遺跡 |
| 9 | 櫛原侍屋敷遺跡 |
| 10 | 鉄砲小路遺跡 |
| 11 | 寺町 |
| 12 | 久留米城下町遺跡 |
| 13 | 十間屋敷遺跡 |
| 14 | 東櫛原今寺遺跡 |
| 15 | 石丸遺跡 |
| 16 | 辻遺跡 |
| 17 | 南薫稻荷遺跡 |
| 18 | 南薫西遺跡 |
| 19 | 南薫本村遺跡 |
| 20 | 日輪寺古墳 |

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

に備え、侍屋敷と城郭の間には東西に長い町屋が形成されている。庄島侍屋敷は久留米城下の南方に設けられた武家屋敷で、主に御側足輕・扶持人・御徒士組の居住地や、上級武士の中・下屋敷などによって構成される。武家屋敷の東端には久留米城と柳河城を結ぶ柳川往還が走り、南西部には村落が広がる。

本遺跡では、これまでに9次に及ぶ調査が実施されている。その中で、比較的遺跡の様相が明らかとなった調査について概略する。第4次調査では、17世紀後半から19世紀前半の井戸、土坑を検出し、「延寶八年図」の馬場家屋敷、「天保年間図」の梶原家屋敷に該当すると推定される。第6次調査は、「延寶八年図」の御側足輕屋敷、「天保年間図」にみえる石井家屋敷の調査で、17世紀末から18世紀前半に比定される遺物が出土し、金泥を塗布した陶器皿等を確認している。第7次調査はニシタテチョウ（西竪丁）からヲハタチョウ（御旗丁）の辻に位置し、屋敷境の溝と考えられる遺構を検出した。第8次調査では18世紀前半から19世紀中頃の遺構が検出され、屋敷境と推定される溝を確認した。第9次調査は本調査地の西側隣接地にあたり、17世紀後半から19世紀初頭の遺構を検出するとともに、埴塼、銅滓などの金属加工関連の遺物が出土した。この他、本遺跡の調査を通して、古墳時代、奈良時代の遺物が若干出土している。遺構は未確認であるが、当該期の集落の存在を想起させるものである。

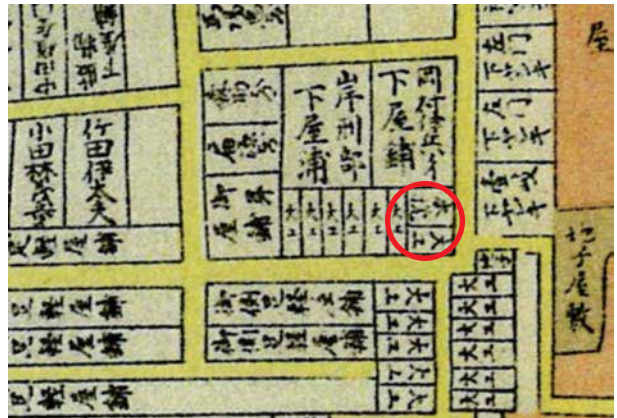


Ⅲ. 調査の記録

i. 調査の目的と経過

調査対象地は遺跡の東側中央に位置し、標高12mを測る低位段丘上に所在する。対象地の西側では平成24年度に第9次調査（「久留米市文化財調査報告書」第340集）が実施され、17世紀後半から19世紀初頭の遺構を検出した。検出遺構の内、南北走行の溝は東を画す屋敷境と推定されていることから、本調査地は第9次調査地の東側に隣接する区画であると考えられた。この区画は、「天保年間図」（1830～1844）や「安政二年改切絵図」（1855年）を参照すると、フルチャウ（古丁）と呼称される小路の北側に面した区画の東端に位置する。当地には「延寶八年図」（1680年）によれば大工長屋と木挽長屋が配されており、天保年間には南端に番所が見られるが、大半が空閑地となっている。その後、安政二年には完全に空閑地となり、「明治二年図」（1869年）では川野家が屋敷を構えたようである。以上のことを踏まえ、本調査では各時期における土地の利用状況を把握することを目的として実施した。

現地調査は、平成27年12月14日に東区から重機による表土剥ぎを開始した。表土を除去した部分から遺構検出及び平板測量を実施し、略図作成が終了した調査区北西部より遺構の掘削を開始した。遺構実測、写真撮影は随時行い、平成28年1月21日には東区の全景写真を撮影した。その後、1月23日から2月4日まで調査対象地西側の既存建物を解体するため現地調査を一時中断した。解体が終了した後、2月5日に西区の表土剥ぎを開始した。遺構検出と平板測量後、調査区東側より遺構掘削を実施し、併せて、遺構実測と写真撮影を行った。3月8日には西区の全景写真を撮影し、3月14日に埋め戻しと機材撤収を終え、全ての現地作業を完了した。



第3図 延寶八年図（1680年）

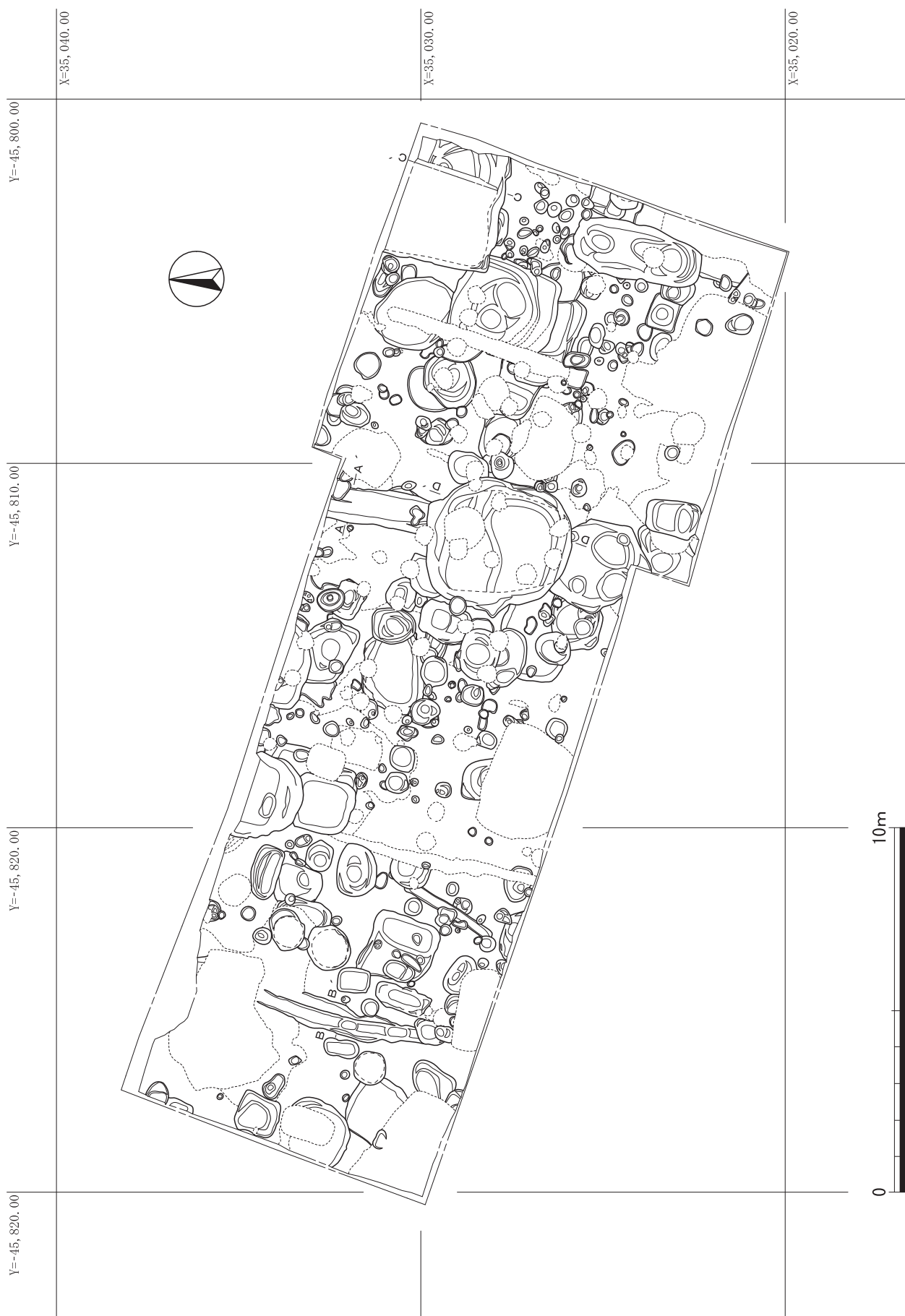


第4図 天保年間図（1830～1844年）

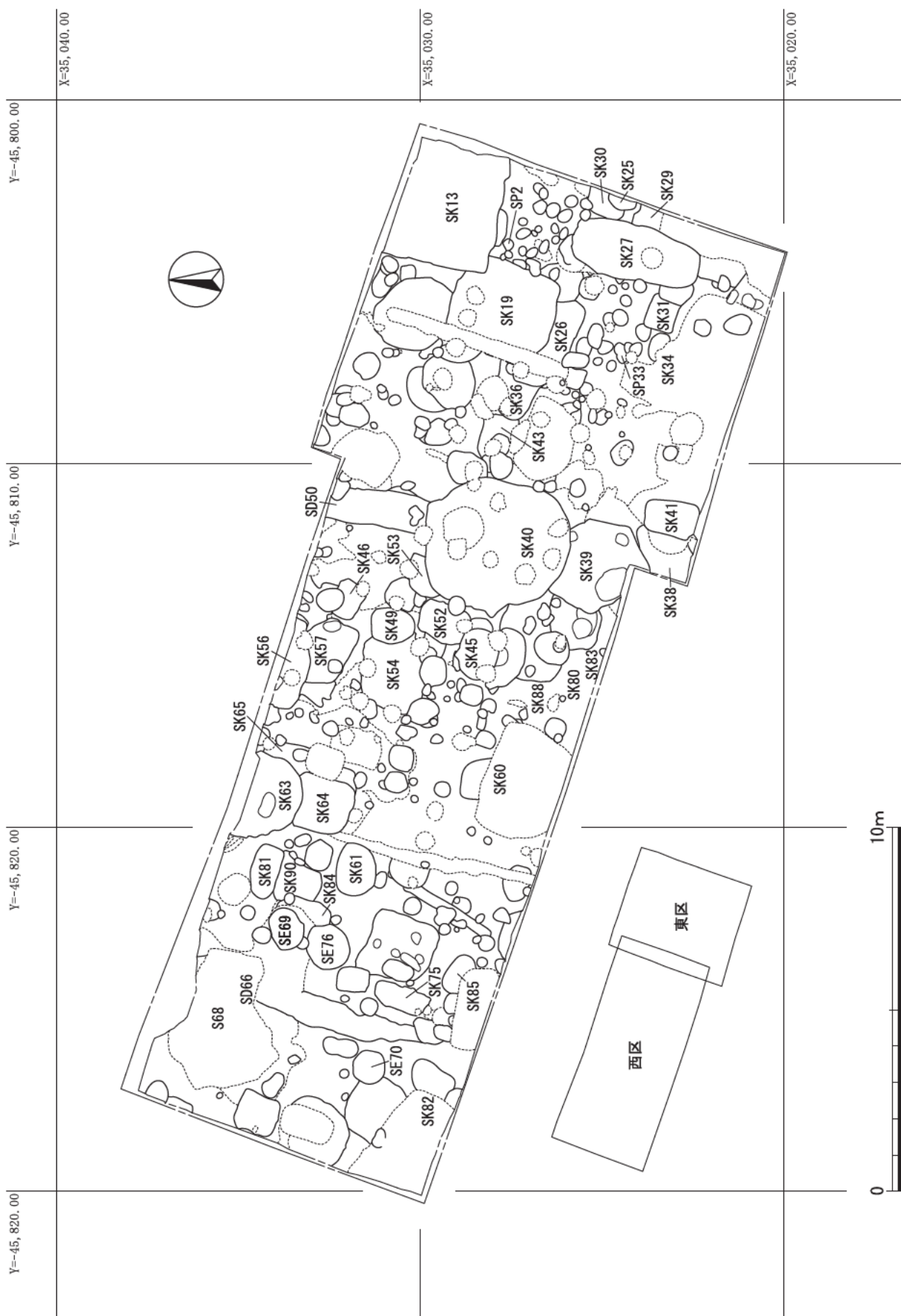


第5図 明治二年図（1869年）

※ ○は調査地



第6図 庄島侍屋敷遺跡第10次調査遺構配置図 (1/150)



第7図 遺構番号図及び調査区区分図 (1/150)

ii. 検出遺構

本調査地の周辺地形は、南から北へ緩やかに傾斜している。基本層序は、調査区の東端では、アスファルトが5cm、碎石が10cm、真砂土が15cm造成され、真砂土直下に焼土層（戦災層）が5cm堆積する。その下位には灰褐色土が15cm、にぶい褐色土が15cm認められ、遺構検出面である地山に至る。一方、調査地の西端では、表土（10cm）下位の灰色土（40cm）を経て地山に達する。本調査における検出面までの深さは、東側で約0.6～0.7m、西側では0.5m程度を測り、検出面の標高は南東側で約12.6m、北西側で12.2m程度を測る。

検出遺構は、溝2条、井戸3基、土坑37基及びピットである。以下、主要遺構について詳述する。なお、建物解体工事の都合上、東区と西区に分け調査を実施した。調査総面積は264㎡である。

溝

SD50（第8図，図版2）

西区北東端で検出した南北走行の溝で、SK40に先出する。検出長は2.70mで、上面幅は1.02m、下面幅は0.69mを測る。深さは28cmで、北方に向かって緩傾斜を成し、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒色系で、ブロック土を多く含む。また、下位層に行くに従い締りが悪い。堆積状況から西側から人為的に埋め戻したと推定される。近世陶磁器2点、土師器小片2点及び釘が出土した。17世紀。

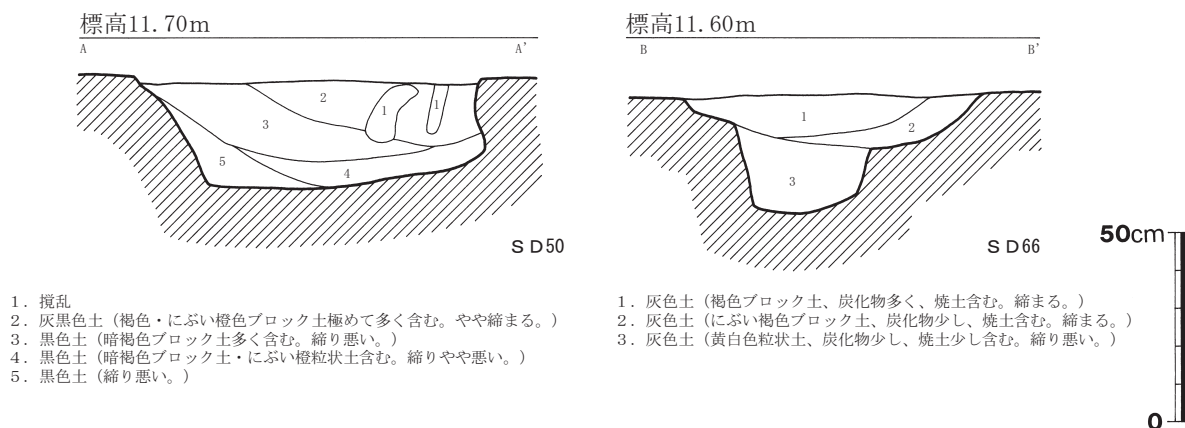
SD66（第8図，図版2）

西区西側で検出した南北走行の溝である。南北両側に攪乱を受けるが、北側では一連の遺構と思われる掘り込みを確認し、調査区北方に延びると考えられる。検出長は6.52mで、上面幅は0.88m、下面幅は0.22～0.30mを測る。深さは34cmで、断面形はU字状を呈する部分と、二段掘りを呈する部分がある。底面は若干の凹凸があるが、ほぼ水平である。埋土は灰色で、ブロック・粒状の土壌を含み、炭化物や焼土が認められた。埋土内からは、大袋半分程度の近世陶磁器、土師器細片・灯明皿片・焜炉片、棧瓦片が出土している。18世紀後半～19世紀の所産か。

井戸

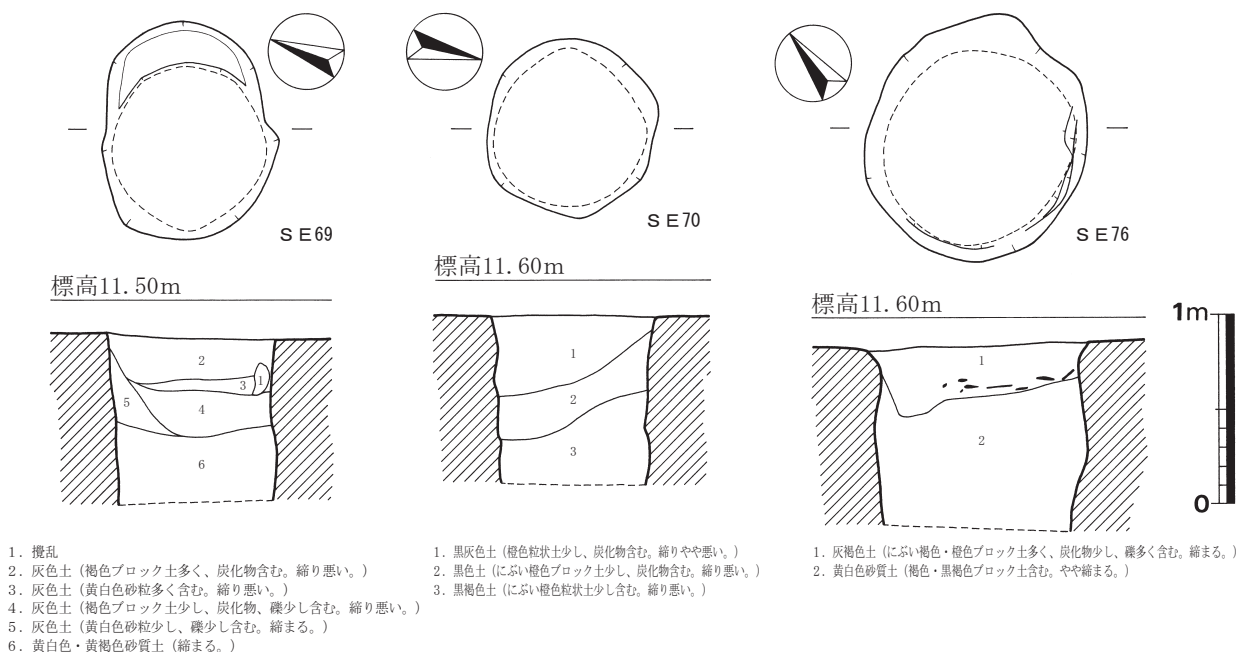
SE69（第9図，図版2）

西区西側で検出した楕円形を呈する井戸である。SK84に後出する。規模は長軸長が1.14m、短



第8図 SD50・66 土層図 (1/20)

Ⅲ. 調査の記録



第9図 SE69・70・76 実測図（1/40）

軸長が0.92mを測る。深さは、ボーリングステッキによる調査では2m以上に及ぶものと想定され、掘方も狭小であるため安全面を考慮し、完掘には至っていない。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、東側には幅15cm程のステップを有しており、崩落に伴うものと推定される。埋土は、上位にブロック土を含む灰色土が認められ、下位に砂質土が厚く堆積していた。埋土内からは近世磁器片、陶器播鉢片、土師器細片および大袋半分程度の平・棧瓦が出土した。18世紀後半～19世紀前半。

SE70（第9図，図版2）

SE69の南西4.5mで検出した。平面形は円形で、規模は直径0.94mを測る。本遺構も完掘していないが、ボーリング調査から、深さは2mを超えと思われる。壁面は垂直に立ち上がり、上端に至る。埋土は黒色を基調とし、締りは悪く、北西方向から流入した状況を看取できる。埋土内からは、細片であるが、小袋1袋分の近世陶磁器、煙管、釘、瓦が出土している。17世紀末～18世紀。

SE76（第9図，図版2）

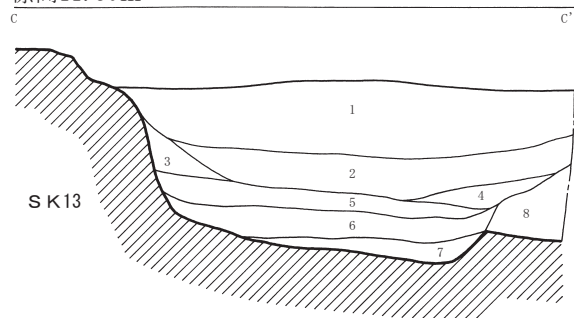
SE69の南側で検出した楕円形を呈する井戸で、完掘には至っていない。SK84に後出する。規模は長軸長が1.31m、短軸長が1.14mで、深さが2m以上に及ぶと推定される。壁面はく字状を呈し、部分的に崩落したと思われる、旧状を留めない。埋土は上位に灰褐色土が30cm程、下位に黄白色砂質土が約70cm堆積し、上位層から近世陶磁器片、土師器片、釘片に加え、棧瓦を含む瓦片が大袋4袋分出土した。18世紀後半～19世紀か。

土坑

SK13（第10図，図版2・3）

東区北東隅で検出した。SK19に後出する。出土遺物から明治時代以降の所産と判断したため部分的な掘削に留めた。平面形は方形もしくは長方形と推定され、検出規模は長軸長3.20m、短軸長2.91m

標高11.50m

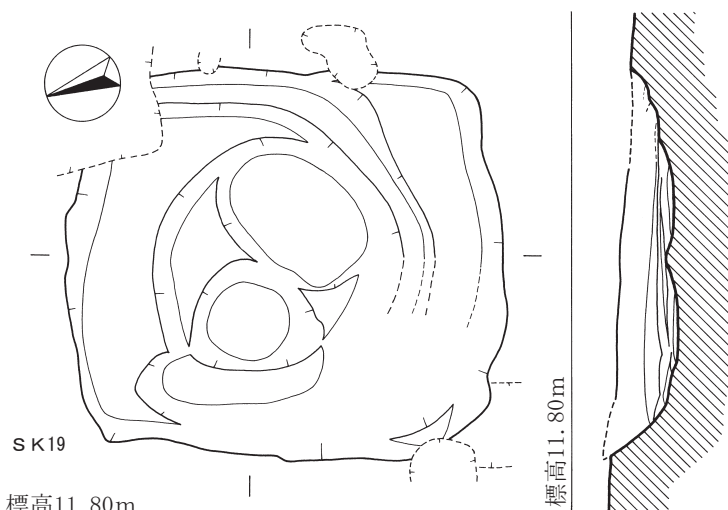


SK13

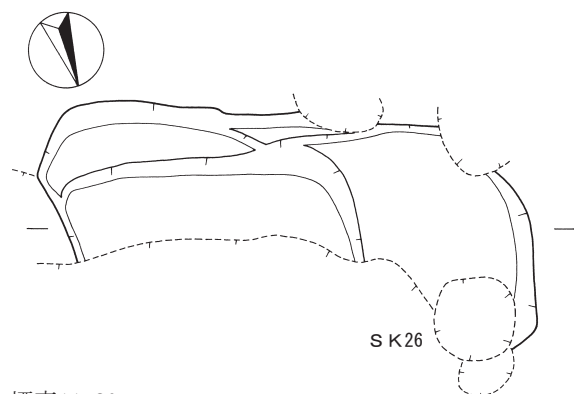
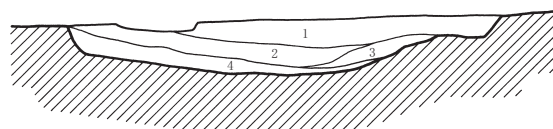
1. 灰色土（黄橙色粒状土少し、炭化物含む。締り悪い。）
2. 灰褐色土（黄橙色粒状土少し、炭化物、遺物多く含む。締り悪い。）
3. 灰褐色土（にぶい褐色ブロック土含む。締りやや悪い。）
4. 灰褐色土（黄橙色粒状土少し含む。締まる。）
5. 灰褐色土（黒色・黄橙色・黄褐色ブロック土多く含む。締りやや悪い。）
6. 暗褐色土（黒色・黄橙色・黄褐色ブロック土少し、炭化物少し含む。締りやや悪い。）
7. 暗褐色土（黄橙色粒状土少し、炭化物含む。締りやや悪い。）
8. 明褐色土（締りやや悪い。）

SK19

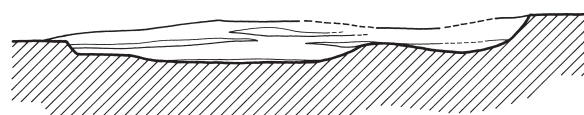
1. 灰褐色土（にぶい黄橙色粒状土少し、礫含む。やや締まる。）
2. 灰褐色土（にぶい黄橙色粒状土極めて少し含む。締り悪い。）
3. 灰褐色土（赤褐色ブロック土含む。よく締まる。）
4. 灰褐色土（黄褐色ブロック土含む。締まる。）



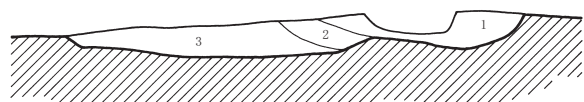
標高11.80m



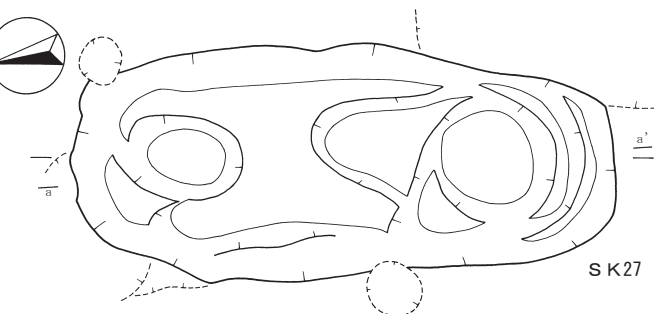
標高11.80m



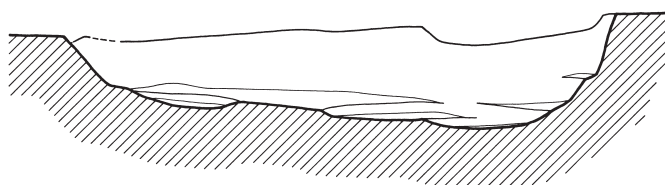
標高11.80m



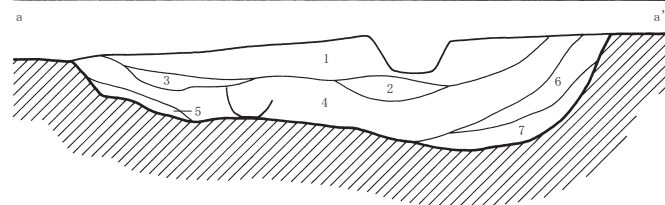
1. 灰色土（黄白色砂粒多く含む。よく締まる。）
2. 灰色土（にぶい褐色ブロック土含む。締まる。）
3. 灰色土（にぶい褐色粒状土含む。締まる。）



標高11.80m



標高11.80m



1. 灰褐色砂質土（礫、炭化物少し含む。締まる。）
2. 灰褐色砂質土（炭化物少し含む。締まる。）
3. 灰褐色砂質土（黄橙色粒状土少し、炭化物少し含む。締まる。）
4. 暗褐色土（炭化物多く、礫多く含む。締りやや悪い。）
5. 暗褐色土（黒色・黄褐色ブロック土含む。締りやや悪い。）
6. 暗褐色土（褐色ブロック土・黄褐色粒状土少し、炭化物少し含む。締りやや悪い。）
7. 暗褐色土（礫極めて多く含む。締り悪い。）

0 2m

0 2m

第10図 SK13 土層図、SK19・26・27 実測図（SK13・26：1/40、その他：1/50）

を測り、深さは最深部で110cmである。埋土は上位から中位にかけて灰色を基調とした土壌で、下位はブロック土を多く含む暗褐色を呈し、下位に行くに従い水平に近い堆積状況を示す。第8層は上位層と異なる明褐色を呈し、上位層に掘り込まれたような堆積状況である。また、床面の北側と南側でレベルに相違が認められ、調査区東壁沿いに地山が立ち上がる部分を確認したことから、第8層は本遺構に先出する可能性がある。埋土内からはパンコンテナー3箱分の近世陶磁器、土師器、窯道具、硯、瓦、銭貨が出土した。なお、近世陶器には柳原焼の碗が含まれ、第1層から出土した。

SK19 (第10図, 図版3)

SK13の南西で検出した。SK13に先出し、SK26・36に後出する。平面形は南北に若干長い方形を呈し、規模は長軸長2.88m、短軸長2.56m、深さ39cmを測る。坑内中央に円形・楕円形を呈する底面を2箇所有し、周囲に複数のステップが認められた。壁面は外傾しながら緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色で、下層ほどブロック土を多く含み、締まった土壌である。埋土内からは近世陶磁器、土師器片、鉄製の小刀・釘、銭貨の他に、瓦が大袋6袋分出土した。18世紀後半～19世紀前半。

SK25 (図版3)

東区東端中央で検出した。SK30に後出する。平面形は円形と推定され、規模は直径0.80mと考えられる。深さは0.84cmまで掘削したが、調査区外に延びるため底面の確認はできていない。埋土は締りの悪い灰色土で、炭化物と礫を含む。埋土内からは近世磁器、土師器の灯明皿、瓦片が4点出土したのみである。近世磁器は17世紀末～18世紀前半と考えられるが、混入品の可能性が高い。

SK26 (第10図, 図版3)

東区中央で検出した。SK19に先出し、SK36に後出する。平面形は隅丸長方形と考えられ、規模は長軸長が2.47mで、短軸長が1.2m以上と推定され、深さは24cmを測る。西側には幅広のステップが、南側には狭長なステップが認められ、壁面は緩やかに立ち上がるようである。埋土は灰色を呈し、締まった土壌で、東側から埋没した状況を看取できる。埋土内からは近世磁器片2点と瓦片14点のみであり、詳細な時期が窺える資料に乏しい。

SK27 (第10図, 図版3・4)

東区東側で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。SK29・30に先出する。規模は長軸長3.61m、短軸長1.58mを測り、深さは最深部で75cmである。底面付近は複数のステップが検出され、凹凸が著しい。壁面は外傾する部分、垂直に近く立ち上がる部分が認められる。埋土は上層に締まった灰褐色砂質土が、下層に締りの悪い暗褐色土が堆積しており、全体的に炭化物を含み、下層ほどブロック土を多く含む。埋土内からは近世陶磁器、土師器片、釘細片、煙管細片、銭貨のほか、パンコンテナー1箱分の瓦が出土した。18世紀後半～19世紀前半。

SK29 (図版4)

東区南東隅で検出した。SK27に先出する。重複関係や調査区外に延びることから、詳細は不明であるが、平面形は方形もしくは長方形と推定される。規模は長軸長3.37m以上、短軸長1.35m以上で、深さは18cmである。埋土は黒色を呈し、締りが悪い。埋土内からは小袋2袋分の近世陶磁器片、土師器片、瓦片が出土した。17世紀末～18世紀後半。

S K30 (図版 4)

東区東端中央で検出した。S K25・27に先出する。平面形は方形と推定され、規模は長軸長1.08m、短軸長0.65m、深さは30cmである。底面北側にはステップが設けられる。埋土は灰褐色土で、埋土内からは近世陶磁器、土師器片、鉄製品細片、瓦片が少量出土したのみである。19世紀。

S K31 (図版 4)

S K27の西1mで検出した長方形を呈する土坑である。規模は長軸長が0.97m以上、短軸長が0.81mを測る。深さは24cmで、断面形は二段掘りになっている。埋土は灰色砂質土で締りが悪い。埋土内からは小袋半分程の近世陶磁器、土師器片、瓦片が出土している。19世紀。

S K34 (図版 4)

S K31の西1mで検出した長円形を呈する土坑である。規模は長軸長0.79m、短軸長0.44m、深さ22cmを測る。坑底の断面形はレンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がり上端に至る。埋土は灰色土で、褐色・黄橙色ブロック土及び炭化物を含む。埋土内からは近世磁器2点、陶器片2点、土師器片1点、瓦片11点が出土した。19世紀。

S K36 (第11図, 図版 4)

調査区中央で検出した。S K19・26に先出し、S K43に後出する。平面形は歪な倒卵形を呈し、規模は長軸長が2.60m、短軸長が中央部分で1.32m、深さが62cmである。底面は西側が一段深く掘り込まれ、中央に広範な平坦面を有し、東側に狭長なステップが認められた。壁面は部分的に袋状を呈している。埋土は締りが悪く、ブロック土を多量に含むもので、人為的に埋没したものと考えられる。埋土内からは近世陶磁器、土師器が少量出土したのみである。18世紀。

S K38 (第11図, 図版 4)

東区南西隅で検出した。S K39に先出し、S K41との重複関係は不明である。平面形は隅丸長方形と推定され、規模は長軸長1.98m以上、短軸長1.29m以上を測り、深さは28cmである。断面形は凹形に近似し、壁面は外傾気味に立上る。埋土は灰褐色砂質土で、締まりが悪い。埋土内からは近世陶磁器、土師器細片及びパンコンテナ半箱分の瓦が出土した。18世紀後半～19世紀前半。

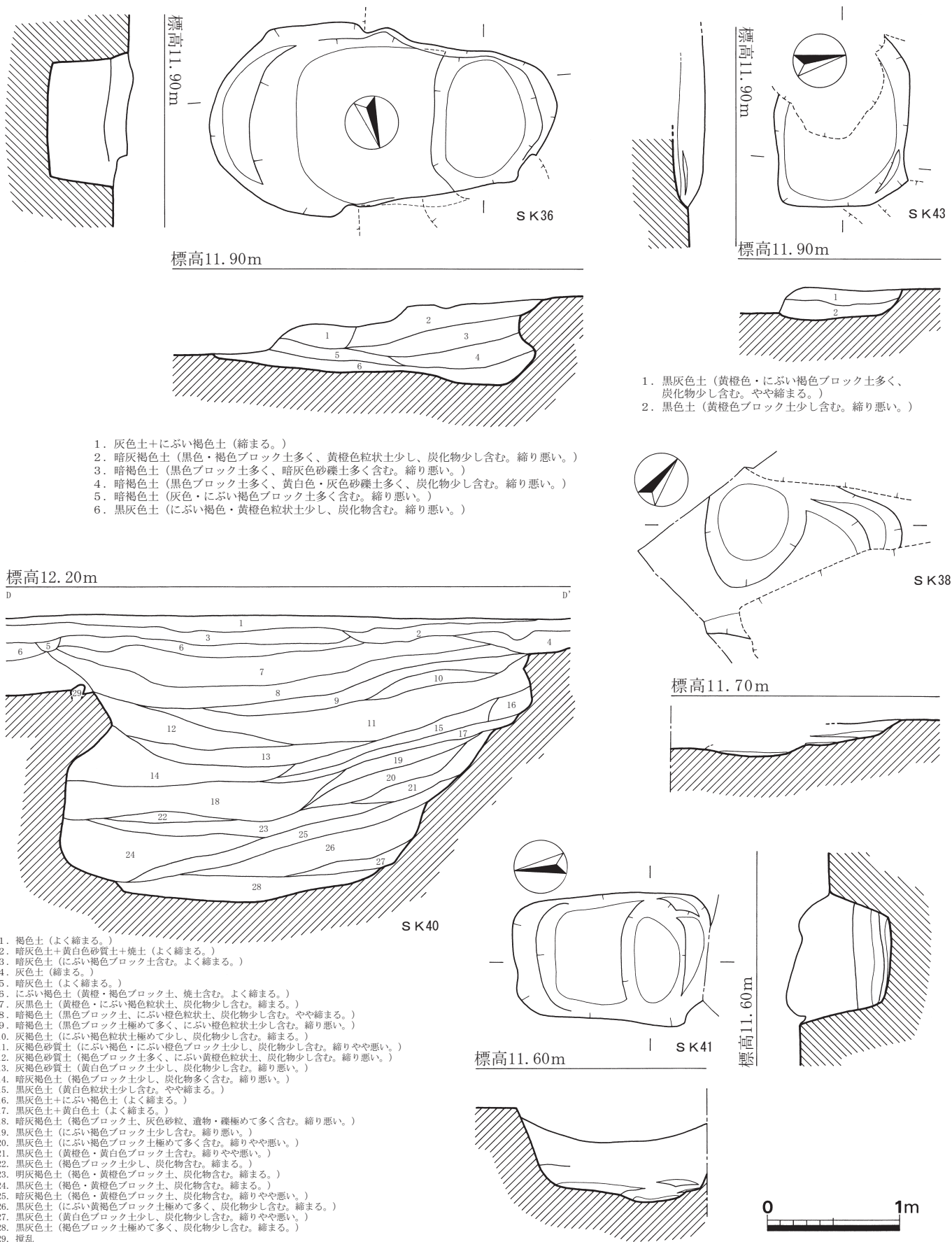
S K39 (図版 5)

S K38の北側で検出した楕円形の土坑である。S K40に先出し、S K38・83・88に後出する。長軸長2.74m、短軸長2.34m、深さ50cmである。底面には広い平坦面が設けられ、西側と東側が僅かに掘り窪められている。また、西側に狭長なステップが、南側には半円形のステップが認められた。埋土は灰褐色砂質土で、白色ブロック土を含み、締まりが悪い。埋土内からは近世陶磁器、土師器皿・焔炉・サナ、釘、瓦が出土し、総量はパンコンテナ1箱である。19世紀前半～中頃か。

S K40 (第11図, 図版 5)

S K39の北側で検出した。主要遺構のすべてに後出する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸長4.04m、短軸長3.60mを測り、深さは198cmである。底面は北半に広い平坦面があり、南半が若干深く掘り込まれていた。壁面は北側を除く三方が袋状を呈し、上端下位には狭長なステップが複数形

Ⅲ. 調査の記録



第11図 SK36・38・41・43 実測図、SK40 土層図 (1/40)

成されている。埋土は全体的にブロック土と炭化物を含んでいた。埋土内からは陶磁器、土師器、窯道具、石製品、鉄製品、ガラス製品、瓦、動物遺存体細片等が出土し、総量でパンコンテナー約15箱分に及ぶ。19世紀。

SK41（第11図，図版5）

東区南西隅の攪乱下位で検出した。SK38との重複関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長1.44m以上、短軸長0.99mで、深さは77cmを測る。底面は楕円形を呈し、周囲に複数のステップが認められる。壁面は緩やかに立ち上り、外傾して上端に達する。埋土は灰褐色砂質土で締まりが悪い。埋土内からは近世陶磁器、土師器片、瓦片が大袋2袋分出土した。18世紀後半～19世紀前半。

SK43（第11図，図版5）

東区中央やや西よりで検出した。SK36に先出する。平面形は隅丸長方形に近似し、規模は長軸長1.28m以上、短軸長0.97m、深さ24cmである。底面の断面形はレンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色系を呈し、水平に近い堆積状況であった。遺物は出土していないため、所属時期は不明である。

SK45（第12図，図版5）

西区の東側中央で検出した長円形を呈する土坑である。SK52に後出する。規模は長軸長1.43m、短軸長1.09mを測り、深さ77cmである。埋土は第1～3層が灰褐色を、第4層以下が黒色系を呈す。埋土の差違に加えて第2層下位に不整合面が認められ、且つ、最上位からは端反碗が、下位からは筒形碗細片が出土したことから、重複関係にあるものと考えられる。遺物は近世陶磁器の他に、上位から土師器片、窯道具細片、釘細片、軒丸瓦細片が、下位から土師器片、瓦片が出土した。上位は19世紀で、下位は18世紀後半～19世紀前半。

SK46（第12図，図版6）

西区北東で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸長1.05m、短軸長0.77m、深さ74cmを測る。断面形はU字形であった。埋土は灰褐色土で、黒色・にぶい褐色ブロック土を多く含み、締まりのある土壌である。埋土内からは大袋1袋分の近世陶磁器片、土師器片、瓦片が出土しているが、詳細な時期の特定には至っていない。

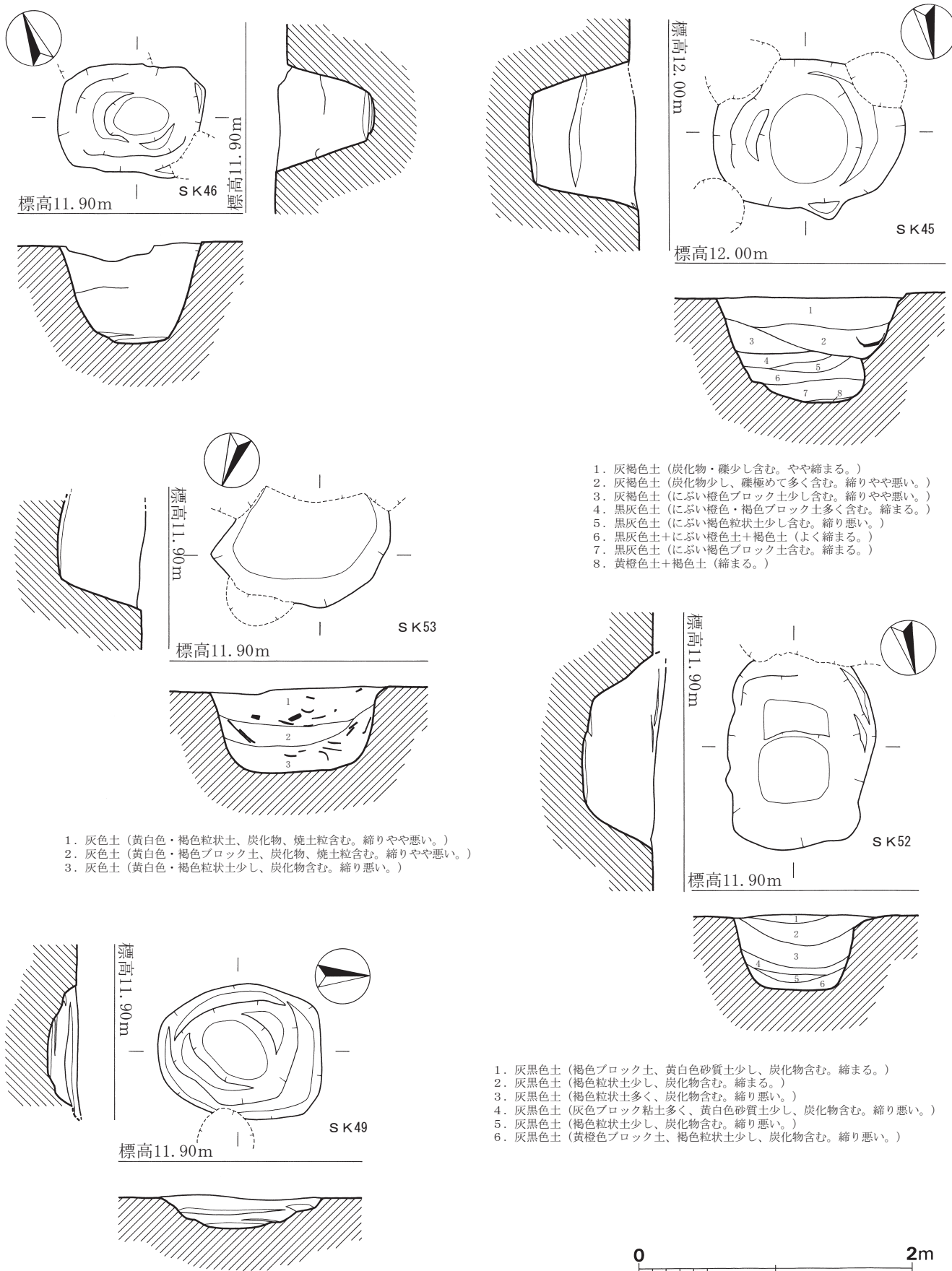
SK49（第12図，図版6）

SK46の南1mで検出した倒卵形を呈する土坑である。SK54に後出する。規模は長軸長1.19m、短軸長0.98mを測り、深さは24cmを測る。坑内中央に楕円形の底面を有し、周囲に狭長なステップが設けられる。埋土は締まりの悪い灰褐色土で、炭化物を少量含む。埋土内からは近世陶磁器と土師器が少量出土した。17世紀後半の遺物を含むが、混入品の可能性もある。

SK52（第12図，図版6）

SK49の南50cmで検出した。SK45に先出する。平面形はやや歪な隅丸長方形で、規模は長軸長1.44m以上、短軸長1.08m、深さ62cmである。底面の断面形はレンズ状で、その南側に一段高い長

III. 調査の記録



第12図 SK45・46・49・52・53実測図 (1/40)

方形のステップがある。壁面は東西壁が内湾気味に、南北壁が緩やかに立ち上がる。埋土は灰黒色を呈し、炭化物を含む。上位はよく締まり、下位は締まりの悪い土壌で、レンズ状堆積を示す。埋土内からは近世陶磁器、土師器細片、釘細片、瓦片のほか、蜆と思われる動物遺存体細片が出土した。遺物総量は大袋3袋分である。17世紀末～18世紀。

SK53（第12図，図版6）

SK52の北東50cmで検出した。SK40に先出する。平面形は倒卵形を呈すと思われ、規模は長軸長1.34m、短軸長0.90m以上で、深さは64cmである。底面はレンズ状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がった後に、東西壁が垂直に近く、北壁が直線的に外傾し立ち上がる。埋土は締まりの悪い灰色土で炭化物や焼土を含んでおり、レンズ状に堆積していた。埋土内からは近世陶磁器、土師器片、土製品、釘細片及び蜆及び浅蛸と推定される動物遺存体細片が出土した。また、瓦はパンコンテナー1箱分が出土しており、棧瓦9点を含む。18世紀後半～19世紀前半。

SK54（第13図，図版6）

東区中央やや東よりで検出した歪な倒卵形を呈する土坑である。SK49に先出する。規模は長軸長が2.44m、短軸長が1.87mであり、深さが81cmを測る。床面は水平に近く、壁面は東西壁が垂直に近く立ち上がり、南北壁が袋状を呈する部分を確認した。埋土は上位が黒灰色土であるのに対して、下位は一樣ではない。全体的にブロック土を多く含むことから人為的に堆積した状況を感じ、壁面の崩落により機能を失い廃棄されたものと推定される。埋土内からは近世陶磁器、土師器片、釘片、瓦片が出土している。17世紀か。

SK56（第13図，図版7）

SK54の2.5m北側で検出した。SK57に後出する。平面形は不明であるが、規模は長軸長2.55m、短軸長0.71m、深さ45cmを測る。底面はほぼ水平で、西側に幅の広い、東側に幅の狭いステップを有す。埋土は灰色を基調とし、焼土、炭化物を含む。また、全体的にブロック土を含み、下層ほど締りが悪い土壌であった。埋土内からは大袋4袋分の近世陶磁器、土師器細片、瓦片が出土した。尚、瓦には棧瓦も含まれる。18世紀後半～19世紀か。

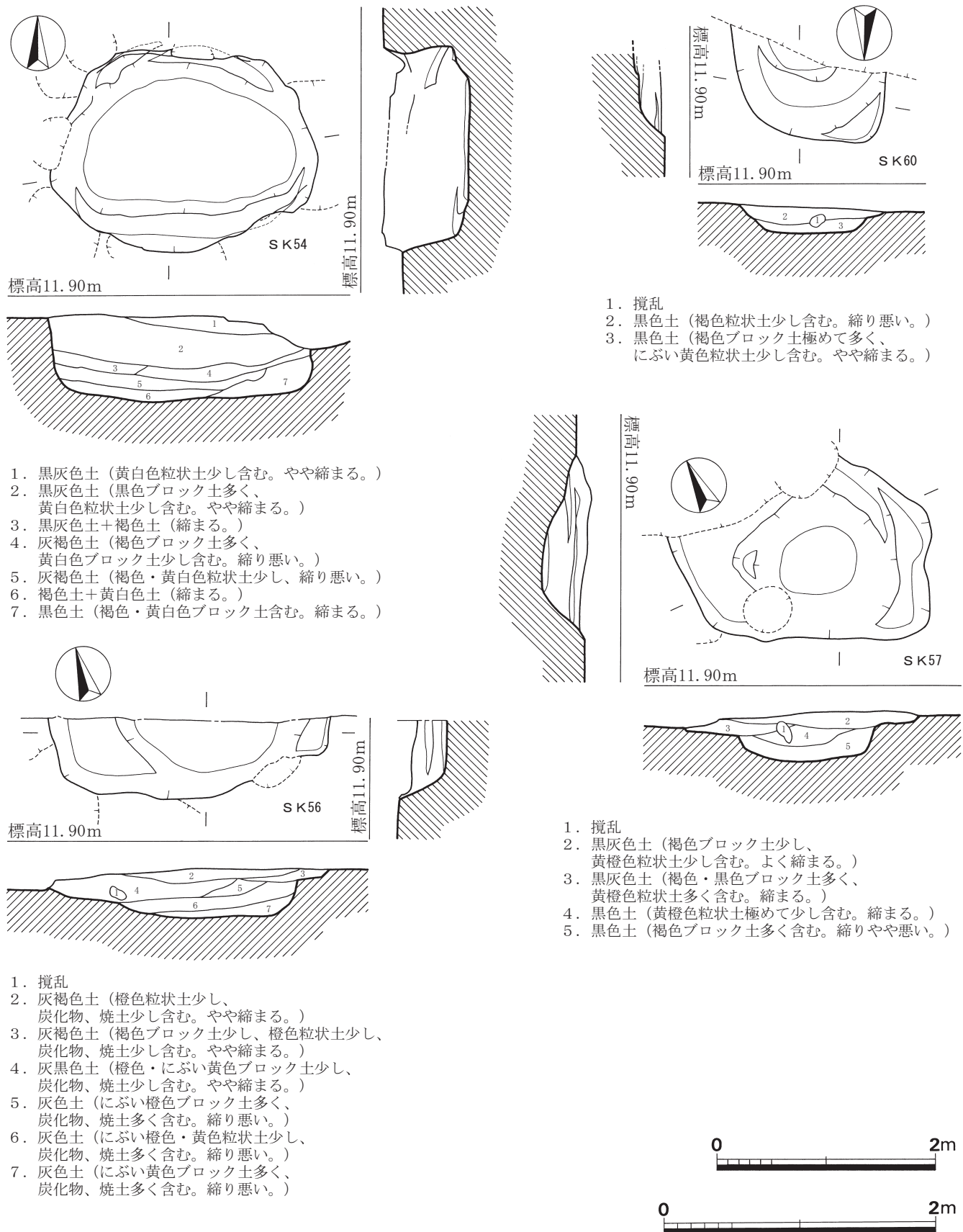
SK57（第13図，図版7）

SK56の南側で検出した倒卵形と推定される土坑である。SK56に先出する。規模は長軸長が2.02m以上、短軸長が1.69mで、深さは38cmを測る。底面の断面形はレンズ状を呈し、10～20cm程度上位に複数のステップが認められた。埋土は黒色系で、ブロック土、炭化物を含む。埋土内からは近世陶磁器、土師器及び瓦が小袋1袋分出土したが、いずれも細片で、所属時期は不明である。

SK60（第13図，図版7）

西区南側中央で検出した。南半に攪乱を受けるが、平面形は隅丸方形を呈すと思われる。規模は長軸長1.09m、短軸長0.63m、深さ23cmである。底面の断面形は凸レンズ状で、壁面は緩やかに立ち上がっている。埋土は黒色を呈し、下層に多量のブロック土を含む。埋土内からは近世陶器、土師器片、煙管片および簪片が出土した。17世紀。

Ⅲ. 調査の記録



第13図 SK54・56・57・60 実測図（SK57・60：1/40、その他：1/50）

SK61 (図版 7)

西区中央やや西よりで検出した。平面形は倒卵形を呈し、規模は長軸長1.46m、短軸長1.10mで、深さ40cmを測る。底面形は円形で、周囲に狭長なステップが4ヶ所確認できた。底面と東西ステップの高低差は10cm、南北は30cmである。埋土は黒灰色土の単層で、黄白色を呈する粒状土を含み、よく締まっていた。埋土内からは近世陶器7点、土師器片17点、瓦片2点が出土した。17世紀か。

SK63 (第14図, 図版 7・8)

西区中央の北端で検出した土坑で、平面形は円形もしくは小判形と推測される。SK64・65に後出する。規模は長軸長が2.46m、短軸長が1.47mを測り、深さは99cmである。底面は水平で、壁面は東側が垂直に近く、西・南側が緩やかに立ち上がっている。埋土は下半にブロック土が多量に観察され、壁面の崩落によるものと思われる。埋土内からは近世陶磁器、土師器、釘細片及び棧瓦片等が大袋3袋分出土した。尚、第4層以下から遺物は出土していない。18世紀前半の遺物を含むが、19世紀の所産と推定される。

SK64 (第14図, 図版 8)

SK63の南側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。SK63に先出し、SK65に後出する。規模は長軸長1.61m以上、短軸長1.50mを測り、深さ91cmである。底面は水平で、壁面は垂直に立ち上がり上端に至る。埋土は上位が灰色系の土壌で締りが悪く、下位が黄褐色粘土でよく締まっていた。第1～4層中からは近世陶磁器、土師器、石製品、ガラス製品及びパンコンテナー1箱分の瓦片が出土した。18世紀後半～19世紀。

SK65 (第14図, 図版 8)

SK65の北東で検出した。SK63・64に先出する。平面形は不明であるが、規模は長軸長1.20m以上、短軸長0.83m以上で、深さは31cmである。床面は水平で、北側に幅0.25mのステップを有す。埋土は黒灰色土の単層で、にぶい褐色ブロック土及び炭化物を含み、締まった土壌である。遺物は出土しなかった。

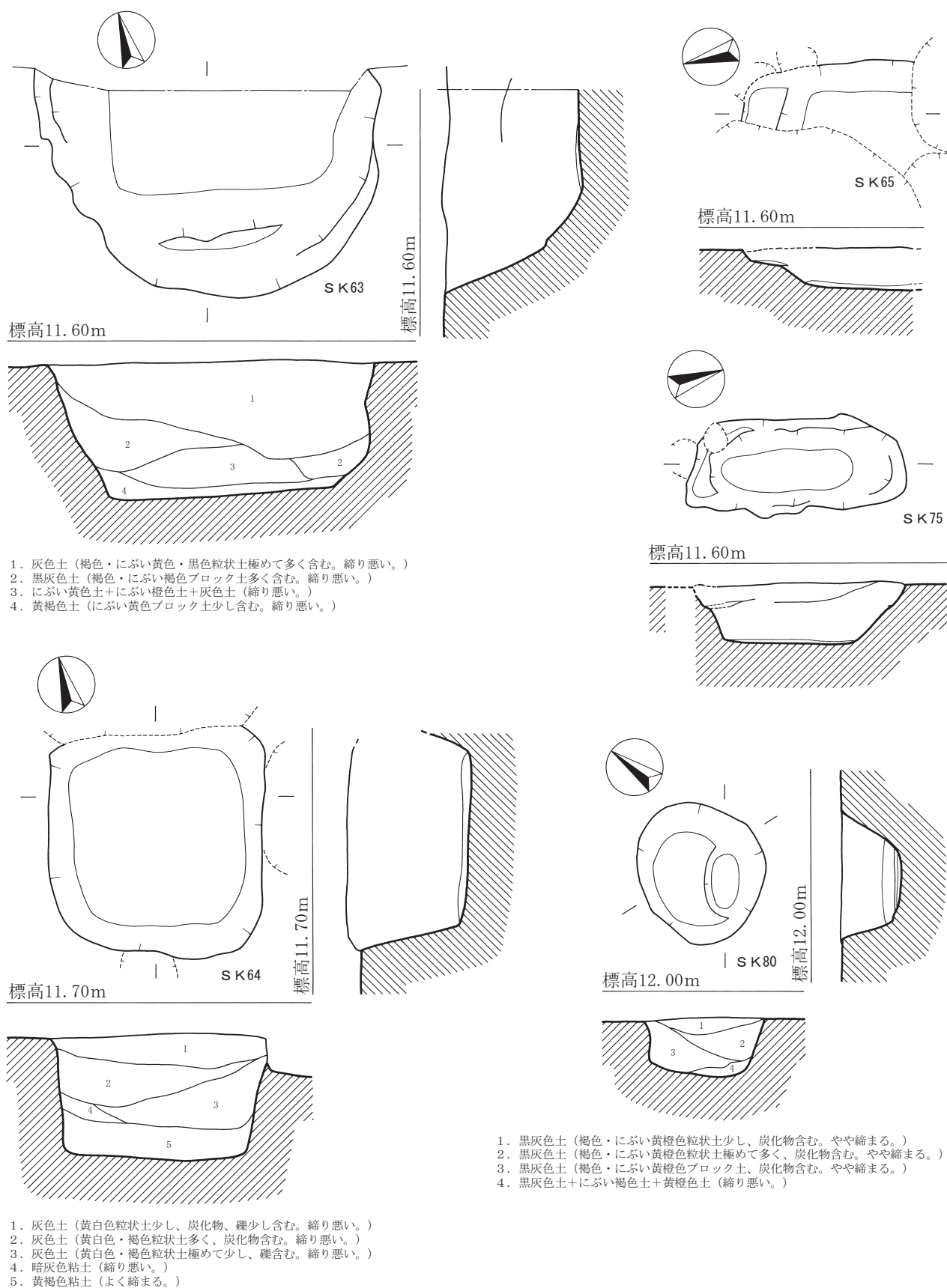
SK75 (第14図, 図版 8)

西区南西側で検出した。平面形は歪な隅丸長方形である。規模は長軸長が1.56m、短軸長が0.71mを測り、深さ44cmである。床面はほぼ水平で、壁面の中程には、狭長なステップと稜が形成されている。埋土は下半にブロック土を含む灰色土で、埋土内からはいずれも細片であるが近世陶磁器、土師器、鉄製品、瓦が少量出土した。瓦には棧瓦片が含まれ、18世紀後半以降と考えられる。

SK80 (第14図, 図版 8)

西区南東で検出した楕円形の土坑で、SK83・88に後出する。規模は長軸長1.04m、短軸長0.89m、深さ44cmを測る。長円形を呈する底面の北側には、幅広のステップを有す。壁面は西側が垂直に近く、その他が外傾して立ち上がる。埋土は黒灰色を基調とした土壌であった。埋土内からは大袋1袋分の白磁、陶器、土師器、鉄製品、窯道具及び瓦が出土した。すべて細片であり、時期は不明。

Ⅲ. 調査の記録



第14図 S K63・64・65・75・80 実測図 (1/40)

S K 81 (第15図, 図版 8)

西区中央の北西で検出した。S K 90に後出する。平面形は隅丸長方形に近似する。規模は長軸長1.48m、短軸長0.78mを測り、深さ17cmである。底面は狭長であり、断面形はレンズ状を呈す。その北側には2段のステップが認められた。埋土は灰色土の単層で、黄色のブロック土を含み、締まった土壌である。遺物は出土していない。

S K 82 (第15図, 図版 9)

西区南西で検出した。倒卵形に近い平面形を呈す。規模は長軸長1.34m以上、短軸長0.90m以上、深さ21cmである。底面は断面形がレンズ状を成し、東側と南側には幅9～35cmの不整形を呈するステップを有す。埋土は灰色土の単層で、埋土内からは近世陶磁器、土師器、釘が小袋2袋分出土したが、いずれも細片で、時期は不明である。

S K 83 (第15図, 図版 9)

西区南東端で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。S K 39・80に先出し、S K 88に後出する。規模は長軸長が1.41m以上、短軸長が1.42mで、深さは0.35cmを測る。底面は若干西へ傾斜し、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。北東側、南西側にそれぞれ2段のステップを設けており、いずれも狭小である。埋土は黒褐色を呈し、少量の炭化物を含み、締まった土壌であった。埋土内からは近世陶磁器、土師器、鉄製釘、瓦及び鈴と推定される土製品が出土した。総量は小袋1袋である。17世紀後半～18世紀。

S K 84 (第15図, 図版 9)

S K 81の南西1mで検出した。S E 69・76に先出し、S K 90に後出する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長1.52m、短軸長0.76m以上、深さ25cmを測る。底面の断面形はレンズ状を呈し、壁面は大きく外傾しながら立ち上がる。埋土は締りの悪い黒灰色土で、褐色ブロック土を含む。遺物は出土していない。

S K 85 (第15図, 図版 9)

S K 84の南4mで検出した倒卵形を呈すと考えられる土坑である。規模は長軸長が1.14m、短軸長が0.59m以上を測り、深さが29cmを測る。底面は小規模で、一段深く掘り込まれている。埋土はブロック土を含む暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

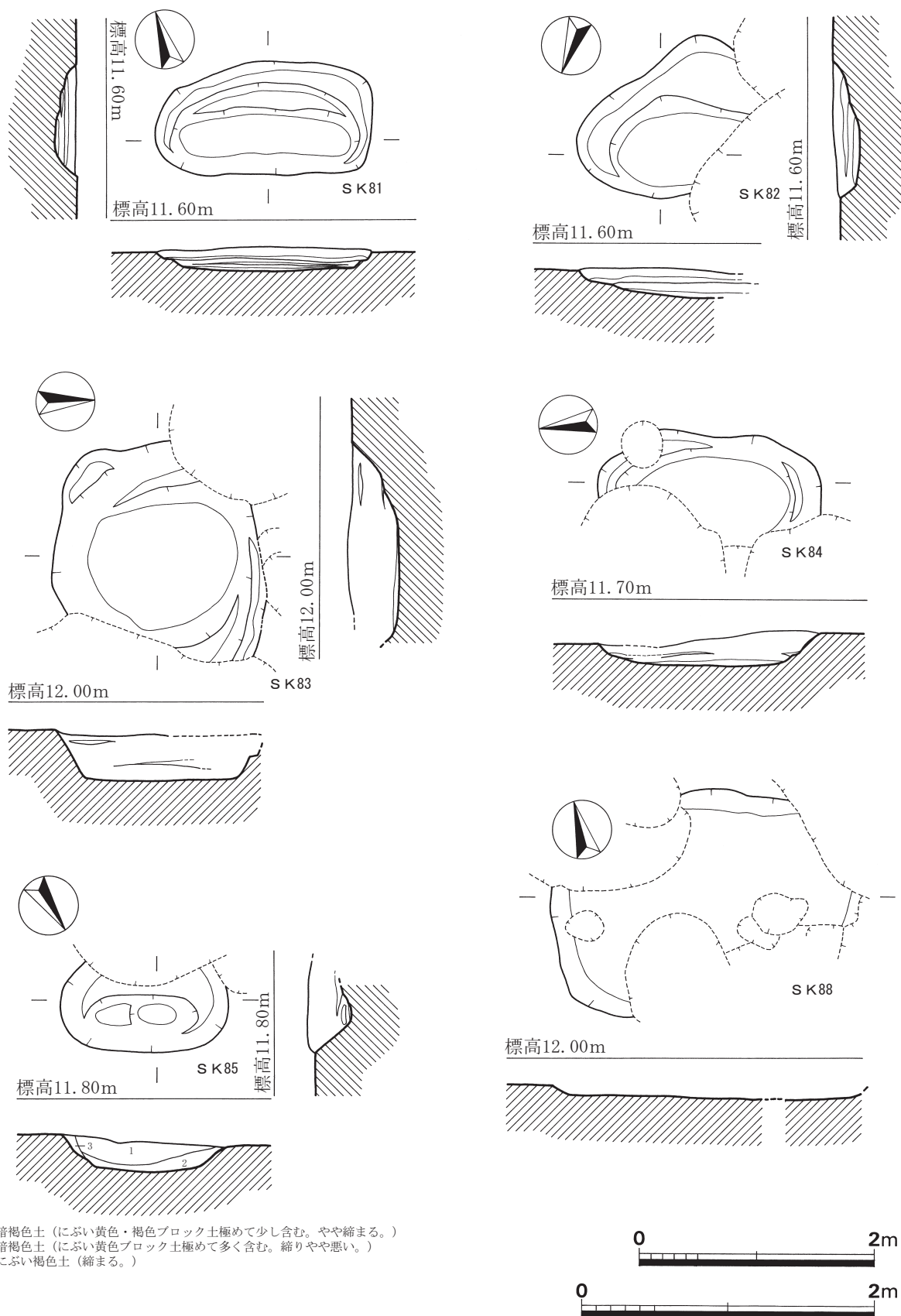
S K 88 (第15図, 図版 9)

S K 83北側で検出した。S K 39・40・80・83に先出する。平面形は隅丸長方形を呈すと推測され、規模は長軸長が2.64m以上、短軸長が1.39m以上である。深さは13cmを測り、底面はほぼ水平である。埋土は黒灰色で、にぶい褐色ブロック土を少し含み、締まった土壌であった。埋土内からは小袋1袋分の近世陶器片5点と平瓦片3点が出土したのみである。17世紀か。

S K 90 (第16図, 図版 9)

S K 84の東で検出した不整形の土坑である。S K 81・84に先出する。規模は長軸長1.59m、短軸長1.39mを測り、深さが46cmである。坑内には南方に緩やかに傾斜する広範なステップを有し、南

Ⅲ. 調査の記録



第15図 SK81・82・83・84・85・88 実測図 (SK88 : 1/50、その他 : 1/40)

側が若干掘り窪められていた。埋土は黒灰色土を基調とし、全体的にブロック土を含む。埋土内からは土製品の鈴が出土したのみで、時期の特定には至らなかった。

ピット

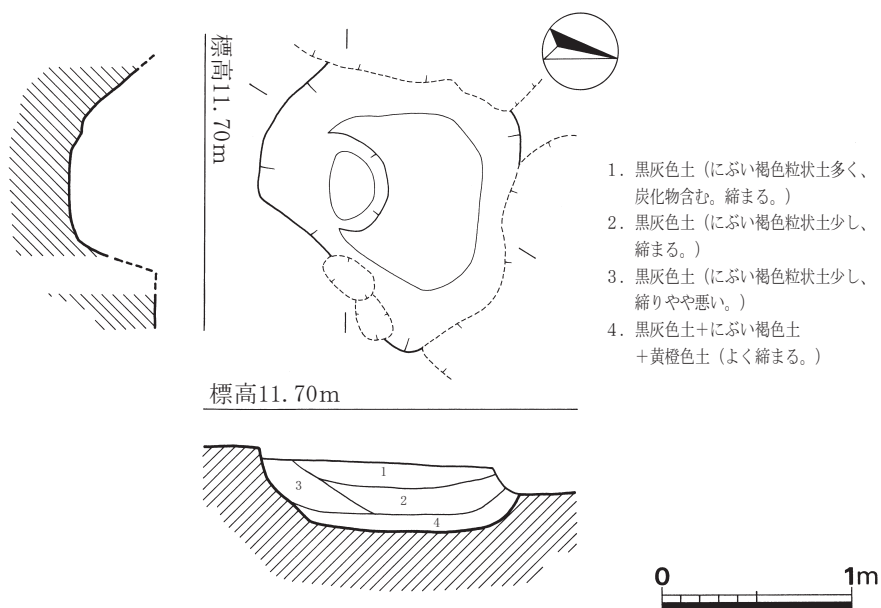
本調査では多数のピットを検出した。散在するような分布状況であるが、東区中央の東よりに比較的密度濃く分布する。規模や形態は多様であり、配置状況からも建物等を構成すると思

われるピットは確認できない。埋土は3つに分けられ、灰色・黒色・にぶい褐色を呈している。大部分が灰色土で、黒色・にぶい褐色土のピットは散見される程度であった。尚、出土遺物を掲載したS P 3・22は、前者が直径0.3m、深さ19cmで灰色を、後者が直径0.5m、深さ30cmで黒色を呈していた。

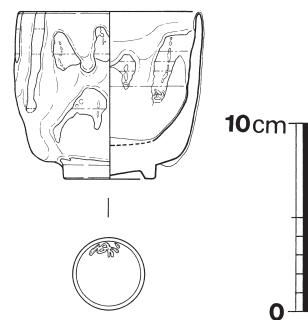
iii. 出土遺物

本調査出土遺物の大半は瓦で、次いで近世陶磁器、土師器の順となる。瓦については調査段階で選別の上、軒瓦および棧瓦の一部を採集したが、細片については持ち帰っていない。また、近世陶磁器や土師器についても、大量に遺物が出土した遺構については文様や器形に特徴のある器種、時期を押えられる遺物などの選別を行ったうえで、一部を持ち帰った。その際には大まかな組成や傾向について気付いた点をメモとして記録したのみである。よって、出土遺物全体の組成を検討するなどの追認作業は不可能であることをお断りしておく。担当者の怠慢を深謝する次第である。

選別して取り上げた遺物はパンコンテナー5箱であるが、本来は30箱相当の遺物が出土している。瓦については前述のとおり大半を調査段階で選別しているため、持ち帰った遺物では近世陶磁器が最も多く、次いで土師器となる。この他には硯や砥石などの石製品、煙管・銭貨・飾金具などの銅製品、簪などのガラス製品が主な遺物として挙げられる。遺物の図化はS K 13から出土した柳原焼の碗についてのみ実施した。詳細については遺物観察表ならびに写真図版を参照されたい。



第16図 SK90 実測図 (1/40)



第17図 遺物実測図 (1/4)

Ⅲ. 調査の記録

第1表 出土遺物観察表①

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾・調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
1 図版10	SD50	磁器	皿	[13.2]	[4.8]	3.2	染付		輪花	折枝花	壺付露胎	型打	白 微砂粒		201510 000101
2 図版10	SD50	陶器	皿	[12.0]	[3.7]	3.9	灰釉			目跡2ヶ所	目跡1ヶ所		灰 微砂粒	全面施釉 溝縁皿	201510 000100
3 図版10	SD66	磁器	碗	[10.8]	[4.6]	5.9	青磁 染付	青磁	四方棒	五弁花?	角満福? 壺付露胎		白 微砂粒		201510 000133
4 図版10	SD66	磁器	碗	10.4	3.8	4.7~ 4.8	染付	竹・梅			壺付露胎		白 微砂粒		201510 000134
5 図版10	SB69	陶器	播鉢		[15.0]	(5.2)	黒釉	回転ナデ 施釉	播目	播目	壺付露胎 砂付着		にぶい黄橙 精良		201510 000136
6 図版10	SE70	磁器	皿			(2.8)	染付		花卉				灰白 微砂粒		201510 000138
7 図版10	SE70	磁器	香炉?			(2.9)	青磁						灰白 微砂粒		201510 000139
8 図版10	SE70	陶器	碗		[4.9]	(1.7)	灰釉			目跡2ヶ所	目跡2ヶ所 露胎		灰 精良		201510 000141
9 図版10	SE70	陶器	碗		[7.6]	(6.8)	褐釉		露胎		壺付露胎 砂付着		灰黄褐 精良		201510 000142
10 図版10	SE70	陶器	碗		4.9	(2.3)	灰釉			蛇目釉刺ぎ	壺付露胎		灰白 微砂粒		201510 000140
11 図版10	SE76	磁器	盞			(2.5)	染付	線・不明					白 精良		201510 000143
12 図版10	SK13	磁器	盞	6.2	1.3 (ツマミ)	2.7	染付	花卉	露胎		焼成前穿孔 あり		灰白 精良		201510 000004
13 図版10	SK13	磁器	盞	[13.6]		3.0	色絵	区画・網目・ 唐花					灰白 微砂粒	最大径: 15.4cm	201510 000017
14 図版10	SK13	磁器	盞	9.5		1.9	染付	みじん唐草					白 微砂粒	最大径: 11.0cm	201510 000026
15 図版10	SK13	磁器	碗	[10.8]	[4.1]	5.5	染付	唐花	幾何	線 藻状松竹梅	壺付露胎	素描き	白 精良		201510 000005
16 図版10	SK13	磁器	碗	10.7	4.2	6.3~ 6.4	染付	花・流水	宝	岩波	壺付露胎		白 精良	78とセットか?	201510 000012
17 図版10	SK13	磁器	碗	(15.3~ 15.4)	5.5	6.8~ 7.1	染付	蛸唐草 蓮弁	四方棒	線 藻状松竹梅	壺付露胎		白 微砂粒		201510 000013
18 図版10	SK13	磁器	小碗	[6.8]	3.2	4.4	染付	鳳凰か?			壺付露胎 変形字	素描き	瀬戸?・白 白色微砂粒		201510 000011
19 図版10	SK13	磁器	小碗	[7.2]	3.0	5.2	青磁				壺付露胎		白 白色微砂粒		201510 000022
20 図版10	SK13	磁器	小碗	[9.0]	[3.3]	(4.9)	色絵	扇窓・花		不明	壺付露胎		白 精良		201510 000008
21 図版10	SK13	磁器	皿	8.5	4.2	2.3~ 2.5	染付			岩・水仙	壺付露胎	型打ち	灰白 精良		201510 000006
22 図版10	SK13	磁器	皿	9.0	5.0	2.1~ 2.2	染付		花卉		壺付露胎	型打ち	白 精良		201510 000025
23 図版10	SK13	磁器	皿	8.7	4.0~ 4.1	2.3~ 2.5	白磁	輪花	菊花	3足ハマ痕	壺付露胎	型打ち	灰白 精良		201510 000021
24 図版10	SK13	磁器	段重	[10.6]	[10.0]	3.9~ 4.0	染付	みじん唐草					灰白 微砂粒		201510 000014
25 図版10	SK13	磁器	段重	[12.8]	[7.6]	5.3~ 5.4	色絵	区画・花					灰白 微砂粒		201510 000016
26 図版11	SK13	磁器	鉢		6.8	(6.7)	染付	山	唐草	山水 3足ハマ痕	壺付露胎	貫入	白 精良		201510 000007
27 図版11	SK13	磁器	德利		[5.6]	(8.8)	染付	蛸唐草	露胎		壺付露胎 砂付着		灰白 微砂粒		201510 000015
28 図版11	SK13	磁器	仏飯器	7.2	4.3	5.2~ 5.3	染付	唐草			壺付露胎		灰白 微砂粒		201510 000027
29 図版11	SK13	磁器	仏飯器	[7.4]	4.4	4.9	青磁				壺付露胎		白 微砂粒		201510 000023
30 図版11	SK13	陶器	碗	[9.7]	4.9	8.7~ 8.7	褐釉	回転ナデ 釉	回転ナデ 釉	釉だまり	高台部露胎 「成」印陰刻		柳原焼・にぶい橙 細砂粒	最大径: 10.0cm	201510 000010
31 図版11	SK13	陶器	鉢	[30.0]	[17.0]	6.8~ 7.1	灰釉		緑釉で文様	目跡5ヶ所	高台部露胎		にぶい黄橙 精良		201510 000018
32 図版11	SK13	陶器	火入		[16.2]	(5.5)	褐釉	回転ナデ 施釉	回転ナデ 露胎	回転ナデ 露胎	目跡2ヶ所 露胎		にぶい黄橙 微砂粒		201510 000028
33 図版11	SK13	陶器	德利		8.2~ 8.4	(21.6)	褐釉	「薩摩や」 「新三」	上部のみ 施釉		永切り 露胎		橙 細砂粒		201510 000029
34 図版11	SK13	陶器	土瓶蓋	7.0~ 7.1	1.4 (ツマミ)	2.8	灰釉		露胎		永切り	二次焼成	橙 精良	最大径: 9.7cm	201510 000024
35 図版11	SK13	陶器	土瓶蓋	6.4~ 6.7	1.8 (ツマミ)	3.5	灰釉	鉄絵	露胎				にぶい黄橙 精良	最大径: 8.5~ 8.6cm	201510 000009
36 図版11	SK19	磁器	碗	[10.4]	4.3	5.9~ 6.0	染付	太湖石 松竹梅			大明年製		白 精良		201510 000031
37 図版11	SK19	陶器	碗	10.4	4.5	6.4~ 6.6	透明釉 緑釉	緑釉	透明釉		高台部露胎	内外で釉を 掛け分ける	にぶい黄橙 微砂粒		201510 000032
38 図版11	SK19	陶器	碗	10.7~ 10.9	4.6	6.7	灰釉	刷毛目	刷毛目	刷毛目	壺付露胎		にぶい橙 精良		201510 000033
39 図版11	SK19	陶器	碗	[9.2]	4.6	5.7~ 5.8	透明釉	山水			「小松吉」印 刻・露胎		肥前系 灰白・精良		201510 000034
40 図版11	SK19	陶器	皿	13.2	5.0	4.0~ 4.1	灰釉		緑釉で文様	蛇目釉刺ぎ 目跡4ヶ所	目跡4ヶ所 露胎		灰白 精良		201510 000035
41 図版11	SK19	陶器	皿	13.0	5.0	3.8~ 4.1	灰釉		緑釉で文様	蛇目釉刺ぎ 目跡4ヶ所	目跡5ヶ所 露胎		灰白 精良		201510 000036
42 図版11	SK25	磁器	皿		[6.0]	(1.6)	染付	線	不明	銀杏	壺付露胎		白 精良		201510 000042

第2表 出土遺物観察表②

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
43 図版11	SK25	土師器	灯明皿	6.6	4.5～ 4.8	0.9～ 1.3		回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	わずかに油 煙付着	浅黄・細砂粒 (長石・石英・雲母)		201510 000043
44 図版11	SK25	土師器	灯明皿	9.5～ 9.9	5.8～ 6.0	1.0～ 2.4		回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	浅黄・細砂粒 (長石・石英・雲母)		201510 000044
45 図版12	SK27	磁器	壺	5.4		(1.3)	色絵	唐子(3人)				口縁部砂付 着	白 精良	最大径:6.7cm	201510 000045 000046
46 図版12	SK27	磁器	碗	[9.4]	[3.3]	5.3	染付	格子・菊花	線	線 五弁花か?			白 微砂粒		201510 000046 000047
47 図版12	SK27	陶器	碗	9.4	3.2	4.9～ 5.0	灰釉				高台無釉	貫入	灰白 精良		201510 000047 000048
48 図版12	SK27	陶器	小壺	7.0～ 7.2	3.7	4.1～ 4.2	褐釉	回転ナデ	回転ナデ			内面・底部 付近露胎	にぶい橙 精良		201510 000048 000049
49 図版12	SK27	陶器	火入		10.0～ 10.1	(8.1)	緑釉	輪宝・線	回転ナデ	回転ナデ～ ナデ	ヘラケズリ	内面露胎 スタンプ	灰白 微砂粒		201510 000049 000050
50 図版12	SK27	陶器	鉢木鉢	28.8	14.3	28.8～ 29.7	灰釉	松(鉄絵)	灰釉・鉄釉	焼成後穿孔 (内面から)	日跡5ヶ所 (胎土目)		古武雄 灰地・二彩唐津		201510 000050 000051
51 図版12	SK29	磁器	碗	11.4	[4.7]	6.0～ 6.1	染付	太湖石 草花			砂付着		灰白 微砂粒		201510 000051 000052
52 図版12	SK29	陶器	皿	14.0	4.6	3.2～ 3.7	緑釉			蛇目釉剥ぎ	宛巾・日跡 高台無釉	稜花形口縁	灰白 精良		201510 000052 000053
53 図版12	SK30	磁器	皿	[8.6]	4.2	2.5～ 2.6	染付	藤 ハマ痕			疊付露胎	型打・輪花 貫入	白 精良		201510 000053 000054
54 図版12	SK31	磁器	碗	7.4	3.8	6.0	染付	格子			疊付露胎		白 精良		201510 000054 000055
55 図版12	SK31	陶器	皿	9.5	3.4～ 3.5	2.4～ 2.6	透明釉			板・渦	疊付露胎	象嵌 スタンプ	三島手 褐灰・精良		201510 000055 000056
56 図版12	SK31	陶器	皿	9.0	4.2	2.0～ 2.4	褐釉	ナデ・押え	菊花		板目?	糸切細工	にぶい橙 微砂粒		201510 000056 000057
57 図版12	SK34	磁器	碗	[10.2]	[4.5]	5.9～ 6.0	染付	山水			線		白 微砂粒		201510 000057 000058
58 図版12	SK36	磁器	碗			(0.8)	染付	線		五弁花		貫入	白 微砂粒		201510 000058 000059
59 図版12	SK36	土師器	灯明皿	10.3～ 10.4	4.2～ 4.6	2.1～ 2.8		回転ナデ	回転ナデ	ナデ	糸切り	油煙付着	浅黄・微砂粒 (雲母・長石・石英)		201510 000059 000060
60 図版12	SK38	磁器	碗	[10.6]	4.2	5.8	染付	格子	格子	格子			白 精良		201510 000060 000061
61 図版12	SK38	陶器	灯明具	[4.7]	3.6	2.4～ 2.5	灰釉				糸切り 砂付着	底部露胎	にぶい橙 微砂粒	最大径:[6.2]cm	201510 000061 000062
62 図版12	SK39	磁器	壺	9.6	[4.2] (ツマミ)	3.0	染付	唐花・雷	雷	唐花・線	変形字		白 精良		201510 000062 000063
63 図版12	SK39	磁器	碗		4.2	(3.8)	染付	格子		不明	疊付露胎		灰 微砂粒		201510 000063 000064
64 図版12	SK39	磁器	小碗	7.4～ 7.6	5.0	6.3	染付	水・草	雷		疊付露胎		白 精良		201510 000064 000065
65 図版12	SK39	磁器	皿	13.6	8.8	3.7～ 3.8	染付	折松葉		山水	蛇目凹形高 台	貫入	白 精良		201510 000065 000066
66 図版12	SK39	磁器	蓮華	(10.0)	4.6	(5.0)	染付			折松葉	疊付露胎		白 精良		201510 000066 000067
67 図版12	SK39	陶器	皿	11.3～ 11.4	4.6	2.6～ 2.7	褐釉			蛇目釉剥ぎ	高台部露胎		にぶい黄橙 精良		201510 000067 000068
68 図版12	SK40	磁器	壺	9.4	4.0 (ツマミ)	3.2	染付	花・流水	宝	岩波	宝		白 精良	12とセットか?	201510 000068 000069
69 図版12	SK40	磁器	碗	[10.6]	4.4	5.9～ 6.0	染付	草花	線	線・寿字	疊付露胎		白 微砂粒		201510 000069 000070
70 図版12	SK40	磁器	碗	[11.0]	4.4	5.1～ 5.2	染付	若松		岩波 ハマ痕2ヶ所	疊付露胎	貫入	白 精良		201510 000070 000071
71 図版12	SK40	磁器	碗	10.8	4.3	5.3～ 5.4	染付	くちなし		くちなし	疊付露胎		白 精良		201510 000071 000072
72 図版12	SK40	磁器	碗	9.4	3.0～ 3.1	4.2	染付	唐花・雷	雷	線 藻状松竹梅	疊付露胎		白 精良		201510 000072 000073
73 図版12	SK40	磁器	小碗	6.8	3.6	5.6～ 5.7	染付	露草丸文			疊付露胎	貫入	白 精良		201510 000073 000074
74 図版13	SK40	磁器	皿	5.6～ 7.7	3.1～ 4.3	1.4～ 1.6	染付		麻の葉繋ぎ		貼付高台	糸切細工 型紙摺り	白 精良		201510 000074 000075
75 図版13	SK40	磁器	皿	[13.0]	8.5	4.1	白磁	輪花	菊花	3足ハマ痕	蛇目凹形高 台	型打ち	白 精良		201510 000075 000076
76 図版13	SK40	磁器	猪口	[7.4]	[5.2]	6.2～ 6.3	染付	竹・線			疊付露胎		白 精良		201510 000076 000077
77 図版13	SK40	磁器	段重	[12.2]	[11.0]	3.9	色絵	雲・宝・龍					白 微砂粒		201510 000077 000078
78 図版13	SK40	磁器	鉢	14.2	7.5	5.5～ 5.7	染付	文字		3足ハマ痕	蛇目凹形高 台		白 精良	「武・角・■」	201510 000078 000079
79 図版13	SK40	磁器	仏飯器	[6.6]	4.1～ 4.2	5.6～ 5.8	染付	蛸唐草・線			底部露胎		白 微砂粒		201510 000079 000080
80 図版13	SK40	磁器	瓶		5.6～ 5.7	(16.8)	白磁		内面露胎		疊付露胎		灰白 精良	最大径:10.7cm	201510 000080 000081
81 図版13	SK40	磁器	水注	7.2	8.8～ 8.9	11.6	染付	牡丹・蝶・ 製斗			疊付露胎		白 精良	最大径:11.1cm	201510 000081 000082
82 図版13	SK40	磁器	戸車	5.2	5.2	1.0	白磁						白 精良		201510 000082 000083
83 図版13	SK40	磁器	戸車	4.85	4.85	1.0	白磁						白 精良		201510 000083 000084
84 図版13	SK40	陶器	皿	10.3	4.7	2.7～ 2.8	褐釉		蛇目釉剥ぎ		高台部露胎		にぶい黄橙 精良		201510 000084 000085

Ⅲ. 調査の記録

第3表 出土遺物観察表③

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
85 図版13	SK40	陶器	鉢	[16.8]	6.7	8.3～ 8.5	褐釉			ハマ痕	高台部露胎		にぶい黄橙 精良		201510 000084
86 図版13	SK41	磁器	碗	9.2	3.5	4.5～ 4.6	染付	花唐草	雷	線 線状松竹梅	畳付露胎		白 精良		201510 000094
87 図版13	SK44	磁器	皿			(3.3)	染付	線		水・菖蒲？	線	貫入	灰白 精良		201510 000096
88 図版13	SK44	陶器	甕	[40.6]		(11.2)	褐釉	回転ナデ	格子目タタキ				にぶい赤褐 微砂粒		201510 000095
89 図版13	SK45	磁器	碗	[10.0]	[4.6]	5.8	染付	山水		不明	畳付露胎		白 微砂粒		201510 000097
90 図版13	SK45	磁器	碗	[10.0]	3.7	5.0～ 5.1	染付	草花			畳付露胎	生掛け くちわんか	白 微砂粒		201510 000098
91 図版13	SK49	陶器	皿			(2.6)	緑釉			蛇目釉剥ぎ・ 鉄禁			灰 精良		201510 000099
92 図版13	SK52	磁器	皿	13.8	5.0	2.9～ 3.6	白磁	輪花	輪花	菊花	畳付露胎 砂付着	型打 生掛け	白 精良		201510 000103
93 図版13	SK52	陶器	皿		5.0	(2.9)	緑釉 透明釉			蛇目釉剥ぎ	高台無釉		灰 精良		201510 000104
94 図版13	SK53	磁器	小碗	6.4～ 6.5	2.5	3.0～ 3.2	染付	笹			畳付露胎	生掛け？	橙 精良		201510 000105
95 図版13	SK53	磁器	小碗	6.5～ 6.8	2.6～ 2.7	3.1～ 3.3	染付	笹			畳付露胎		灰白 精良		201510 000106
96 図版13	SK53	磁器	小坏	6.3	3.2	3.0～ 3.1	染付	山水・家・ 釣り人				若■	白 精良		201510 000107
97 図版13	SK53	磁器	皿			(4.4)	白磁			蛇目釉剥ぎ			灰白 精良		201510 000108
98 図版13	SK53	陶器	擂鉢			(2.7)	褐釉	回転ナデ	回転ナデ			口縁部のみ 施釉	灰黄褐 微砂粒		201510 000109
99 図版13	SK54	陶器	皿			(1.7)	灰釉						灰褐 精良		201510 000114
100 図版13	SK54	土師器	土鍋			(4.0)		ナデ・押え	ハケ目			外面スス付 着	にぶい黄橙・細砂粒 (長石・石英・雲母)		201510 000113
101 図版13	SK54	須恵器	甕			(2.0)		タタキ後ナデ	当具痕				灰・細砂粒 (長石・石英・角閃石)		201510 000115
102 図版14	SK56	磁器	碗		[3.9]	3.9	染付	二重網目	網目	菊花	寿		白 精良		201510 000118
103 図版14	SK60	陶器	皿	[14.8]		(3.4)	灰釉			目跡1ヶ所			白 精良		201510 000119
104 図版14	SK60	陶器	皿	[13.8]	4.9～ 5.0	3.5	灰釉			目跡4ヶ所	目跡4ヶ所		淡黄橙 精良		201510 000120
105 図版14	SK61	陶器	擂鉢			(5.3)	褐釉	回転ナデ	摺目9本			口縁部のみ 施釉	灰 微砂粒		201510 000123
106 図版14	SK63	磁器	碗		[3.9]	(2.8)	染付	花？		草花	宣明年製		白 精良	1760～80年代	201510 000124
107 図版14	SK63	磁器	碗		[4.0]	(5.1)	染付	草花			線 畳付露胎		白 精良		201510 000125
108 図版14	SK63	陶器	鉢			(4.5)	褐釉		蓮弁？				にぶい褐 微砂粒		201510 000126
109 図版14	SK64	磁器	皿		[7.2]	3.9	染付	唐草・線	花唐草・笹		線 畳付露胎		白 精良		201510 000127
110 図版14	SK64	陶器	碗	10.6～ 10.7	4.4～ 4.5	5.2～ 5.4	灰釉				畳付露胎		褐灰 精良		201510 000128
111 図版14	SK64	陶器	甕	[32.0]	13.3～ 13.4	24.8～ 25.2	褐釉	刷毛目		目跡6ヶ所	畳付露胎		古武雄 褐灰・精良		201510 000132
112 図版14	SK64	土師器	炭炉		20.5	(22.5)		ナデ	ナデ・押え	ナデ		底部スス付 着	淡黄橙・砂粒(長石・ 石英・雲母・角閃石)		201510 000129
113 図版14	SK82	陶器	胴部片			(5.2)	緑釉	花・輪宝	露胎			スタンプ	淡黄 細砂粒		201510 000144
114 図版14	SK83	陶器	皿			(1.0)	透明釉						灰白 精良		201510 000145
115 図版14	SK83	陶器	擂鉢			(3.6)	褐釉	回転ナデ	摺目			口縁部のみ 施釉	灰 微砂粒		201510 000146
116 図版14	SK83	土師器	土鍋			(3.8)		回転ナデ・ 押え・刷毛目	刷毛目			外面スス付 着	にぶい黄橙・細砂粒 (雲母・長石・石英)		201510 000147
117 図版14	SK88	陶器	皿			(2.7)	灰釉	回転ヘラケ ズリ・回転ナデ	施釉				淡黄 精良		201510 000150
118 図版14	SP2	磁器	皿	[15.4]	9.0	4.8	白磁			目跡2ヶ所	蛇目凹形高 台	墨書「萬■ ■哉？」	白 精良		201510 000001
119 図版14	SP33	陶器	皿			(2.0)	灰釉						黄灰 精良		201510 000059
120 図版14	SK53	土製品	燈籠	4.5	(4.3)	(3.8)		胡粉			墨書あり	型押し 接着	細砂粒(石英・長 石・雲母)	重：30.7 g	201510 000112
121 図版14	SK90	土製品	鈴	4.0	2.8	2.7		ナデ・押え	ナデ・押え			玉入り	精良(雲母・長石)	重：13.15 g	201510 000151
122 図版14	SK13	石製品	硯	(19.0)	8.7～ 8.8	3.3		ケズリ	ケズリ			墨付着	天草石	重：886 g	201510 000019
123 図版14・15	SK40	石製品	硯	17.8	6.0	1.9		ケズリ	ケズリ 墨痕			「石儀」等数か 所に文字	赤間石	重：372 g	201510 000071
124 図版15	SK40	ガラス	簪か	10.3	0.5	0.5		棒						重：4.95 g	201510 000092
125 図版15	SK64	ガラス	簪か	1.4	1.4	(1.2)							淡青緑	重：3.2 g	201510 000130
126 図版15	SK13	銅製品	銭貨	(2.3)	2.4	0.1							新寛永	重：1.5 g	201510 000030

第4表 出土遺物観察表④

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法 量			染付 釉薬	装 飾 ・ 調 整			底面・高台 内印銘等	特徴	製作地・胎土	備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
127 図版15	SK19	銅製品	銭貨	2.5	2.5	0.15								重：2.05g	201510 000040
128 図版15	SK27	銅製品	銭貨	2.5	2.5	0.15						文銭		新寛永 重：2.8g	201510 000051
129 図版15	SK27	銅製品	銭貨	2.5	2.5	0.15						文銭		新寛永 重：2.85g	201510 000052
130 図版15	SK40	銅製品	飾金具	2.9	1.2	0.4								重：1.0g	201510 000090
131 図版15	SK40	銅製品	飾金具	3.9	1.4	0.5								重：3.7g	201510 000091
132 図版15	SK40	銅製品	管	(14.0)	0.4～ 1.5	0.2～ 0.6						飾り付		重：5.8g	201510 000093
133 図版15	SK60	銅製品	管	(15.0)	0.3～ 0.4	0.2～ 0.3								重：7.05g	201510 000122
134 図版15	SK60	銅製品	煙管	(4.4)	0.6～ 1.4	(2.4)						竹管残る		重：3.15g	201510 000121
135 図版15	SD50	鉄製品	釘	(7.7)	0.2～ 0.6	0.2～ 0.6								重：6.6g	201510 000102
136 図版15	SK19	鉄製品	小刀	(14.1)	1.3～ 2.1	0.2～ 0.6								重：34.5g	201510 000039
137 図版15	SK19	鉄製品	釘	(7.7)	1.0～ 1.3	1.0～ 1.4								重：18.05g	201510 000038
138 図版15	SK19	鉄製品	釘	(3.8)	0.2～ 0.5	0.2～ 0.4								重：2.15g	201510 000041
139 図版15	SK54	鉄製品	釘	(4.7)	(0.7)	(0.5)								重：2.75g	201510 000117
140 図版15	SK83	鉄製品	釘	(5.7)	0.3～ 0.6	0.3～ 0.5								重：5.0g	201510 000148
141 図版15	SK83	鉄製品	釘	(5.8)	0.2～ 1.0	0.2～ 1.2								重：10.5g	201510 000149
142 図版15	S68	鉛製品	弾丸	2.4	1.3	1.4								重：27.1g	201510 000135
143 図版15	SE69	瓦	棧瓦	(7.5)	(9.0)	2.0		ヘラケズリ・ ナデ	ナデ				微砂粒(雲母・長 石・角閃石)	重：176g	201510 000137
144 図版15	SK13	瓦	軒平瓦	(5.3)	(7.0)	2.0～ 3.9		唐草・ナデ	ナデ				微砂粒(雲母・長 石)	重：116g	201510 000020
145 図版15	SK19	瓦	軒丸瓦	(11.4)	(15.2)	(8.6)		丸・巴・ナデ	布目・ナデ				細砂粒(長石・石 英・雲母)	重：564g	201510 000037
146 図版15	SK53	瓦	軒丸瓦	(11.0)	(7.0)	2.0～ 3.1		丸・花卉・ ナデ	ナデ・押え				細砂粒(長石・石 英・雲母・角閃石)	重：176g	201510 000110
147 図版15	SK53	瓦	軒平瓦	(23.2)	(20.5)	1.7～ 4.0		唐草・ナデ	ナデ				細砂粒(長石・石 英・雲母)	重：116g	201510 000111
148 図版15	SK54	瓦	軒平瓦	(9.8)	(17.4)	2.2～ 3.7		唐草・ナデ	ナデ				細砂粒(長石・石 英・雲母)2cmの石	重：464g	201510 000116
149 図版15	SK64	瓦	軒丸瓦	(7.8)	10.7	(1.4～ 2.6)		丸・三巴	ナデ・押え			わずかにス ス附着	細砂粒(長石・石 英・雲母)	重：156g	201510 000131

IV. 総括

総括として本調査地に係る文献等を概観した上で、主要遺構の整理を行い、本報告を終えたい。

本調査地について絵図を参照すると、延寶五年（1677）以前は空閑地であり、延寶八年（1680）には大工長屋と木挽長屋を確認できる。また、天保年間（1830～1844）及び安政二年（1855）には再び空閑地となっており、明治二年（1869）には川野家が居を構えていたことが判る。大工長屋と木挽長屋が配された背景については不明であるが、川野家については「中扨従御徒士畧系図」や「久留米藩御記録分限帳」によると、当川野家は分家にあたり、川野市郎兵衛の二男であった故忠を祖とする。故忠は享保七年（1722）に御徒士組に召し出され、元文五年（1740）組頭を経て、延享二年（1745）には中小性組となっており、御徒士組の際には12石3人扶持、中小性組の際には80石の禄を受けていたようである。故忠には忠壽、永忠、方教、忠榮の4人の男子がいたが、忠壽と永忠に男子はなく、方教は別家を成していたため、忠榮が家督を継いだ。忠榮の子を忠寛といい、忠寛が病死した後、百吉が家名を継承することになる。百吉は安政六年（1859）に川野家の養子となり、文久元年（1861）

に御徒士組として勤仕し、明治二年（1869）には庄島侍屋敷に住まい、家老である飛騨殿附奥詰であったことが文献上明らかである。以上のことから、「明治二年図」に見える川野家は、百吉が家主であったものと考えられ、安政三年（1856）から明治元年（1868）の間に当地を拝領したと思われる。

さて、本調査において検出した主な遺構は溝2条、井戸3基、土坑37基である。この内、最も古く位置づけられるものは、S D50、S K54・60・61・88で、17世紀の所産と推定される。また、これに続くものとしてS E70、S K29・36・43・52・83が挙げられ、17世紀末～18世紀代と考えられる。延宝八年（1680）に本調査地には大工長屋等が配されていたようであるが、それらの遺構から出土した遺物は少量であり、関連性は不明と言わざるを得ない。尚、S D50については第9次調査で検出された屋敷境とされるS D35と走行方位を異にしていることから、侍屋敷整備以前の遺構である可能性もあり注目される。次に、18世紀後半から19世紀前半と考えられる遺構で、S K19・26・27・38・39・41・45・53・56・64・75などがあり、この時期の遺構が最も多く、調査区域全体で検出した。一方で、絵図によると19世紀前半には本調査地は空閑地であり、検出遺構と絵図との状況に相違が認められる。これは、想像の域を出ないが、土坑には廃棄土坑として使用されたと考えられるものが大半を占めていることから、空閑地が塵芥の廃棄場として利用されていたのではないだろうか。都市における塵芥処理に関しては、処理内容や処理場を指定した触等が見られるが、久留米藩内でどのように取り扱われていたのか、文献上では判然としない。今後、本調査地周辺の空閑地における土地利用状況を注視することで、明らかになってくるものと思われる。それらの遺構に続くのが、幕末を前後する時期のS K13・25・30・31・34・39・40・63などで、「明治二年図」に記載される川野家に関連するものと思われる。用途不明の土坑が多いが、S K13・39・40については、いずれも廃棄土坑としてその機能を終えている。建物痕跡は確認できていないが、土坑は主に調査区の東側に分布していることから、対象地の西側に存在していたと推定される。

最後に、S K13から出土した柳原焼の碗についてであるが^(註)、柳原焼は9代藩主有馬頼徳が創始した御庭焼で、文政七年（1824）に柳原園で用いる陶磁器を領内の赤坂窯に注文したことに始まり、弘化三年（1846）まで続いたとされる。庭内で焼かれたのは天保三年（1832）から同十二年（1841）の僅か9年間で、園内新柳原の本窯で小品を焼成したといわれ、窯は他に、城内二の丸の内窯の存在が指摘されている。柳原焼の特徴の一つとして、国内外様々な陶磁器を模している点が挙げられるが、本調査出土品がどの窯で焼成されたものか、どの陶磁器を写したものか定かではない。しかし、頼徳の花押である「成」印が陰刻され、小品であることから、本窯で焼成された可能性が高いと考える。

先述のとおり、当川野家は分家であり、百吉の大叔父にあたる方教も別家を成していることから、川野家は下級武士でありながらも、比較的重用された家柄であったと推定される。また、百吉は明治二年には飛騨殿附奥詰として勤仕していたという事実もその証左となろう。この飛騨殿とは四家老の一つである岸有馬家の一知と考えられる。一知は9代藩主頼徳の弟にあたることから、百吉が奥詰として忠勤に励むなかで、一知を介して柳原焼の碗が下賜されたのではないだろうか。

（註）中村美穂「久留米藩御庭焼 柳原焼について」茶の湯文化学会近畿例会 2009

写 真 図 版



(1) 東区全景 (西から)



(2) 西区全景 (東から)

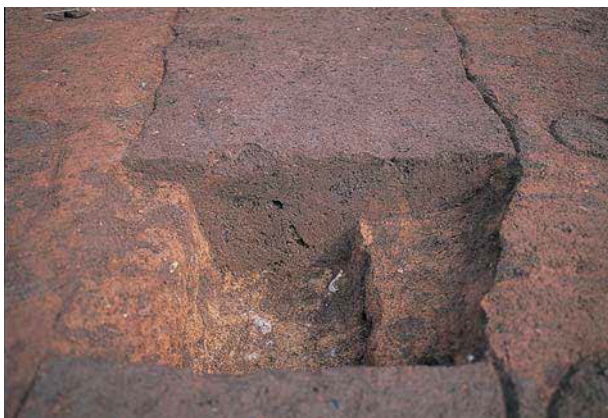
図版 2



(1) S D50 土層 (南東から)



(2) S D50 完掘状況 (北から)



(3) S D66 土層 (南から)



(4) S D66 完掘状況 (南から)



(5) S E69 土層 (南西から)



(6) S E70 土層 (北東から)



(7) S E76 土層 (南から)



(8) S K13 土層 (南東から)



(1) S K13 掘削状況① (北西から)



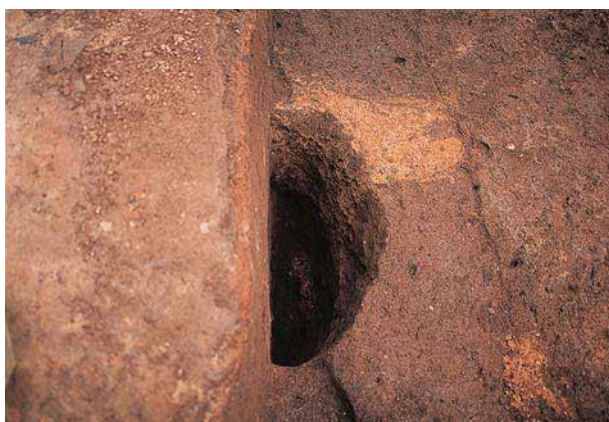
(2) S K13 掘削状況② (南西から)



(3) S K19 土層 (北西から)



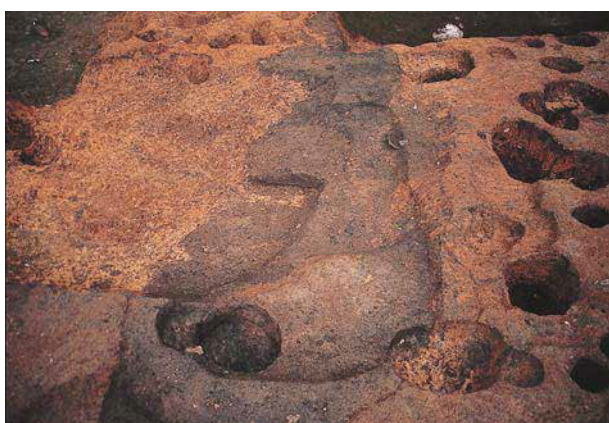
(4) S K19 完掘状況 (南西から)



(5) S K25 掘削状況 (北東から)



(6) S K26 土層 (北から)



(7) S K26 完掘状況 (北西から)



(8) S K27 土層 (北から)

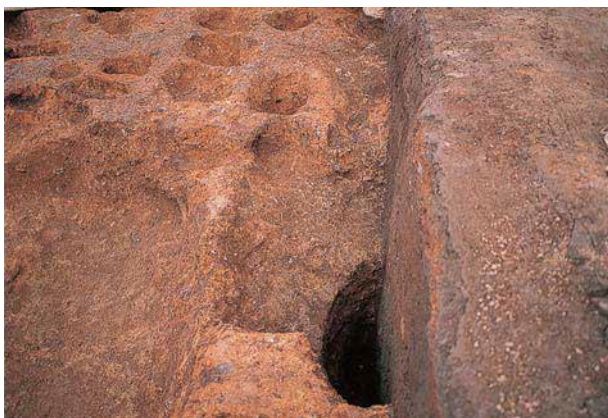
図版 4



(1) S K27 完掘状況 (北東から)



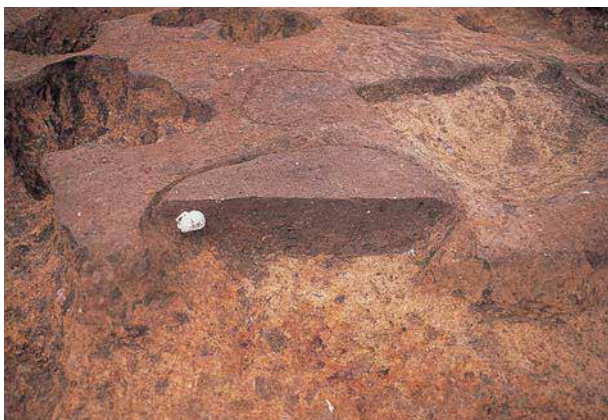
(2) S K29 完掘状況 (北西から)



(3) S K30 完掘状況 (南西から)



(4) S K31 完掘状況 (南西から)



(5) S K34 土層 (南から)



(6) S K36 土層 (北東から)



(7) S K36 完掘状況 (西から)



(8) S K38 完掘状況 (南西から)



(1) SK39 完掘状況 (南東から)



(2) SK40 上層土層 (南東から)



(3) SK40 下層土層 (北東から)



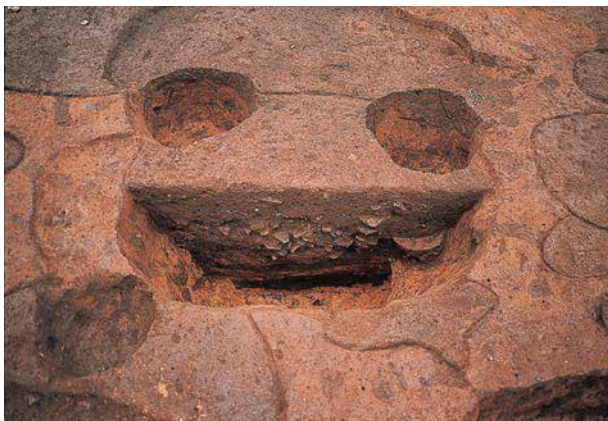
(4) SK40 掘削状況 (北東から)



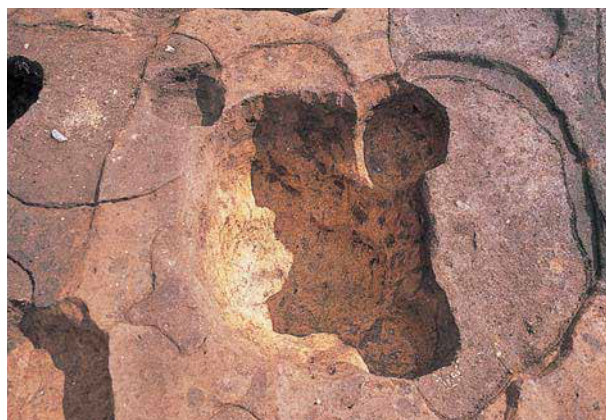
(5) SK41 完掘状況 (北から)



(6) SK43 完掘状況 (南西から)



(7) SK45 土層 (北から)



(8) SK45 完掘状況 (西から)

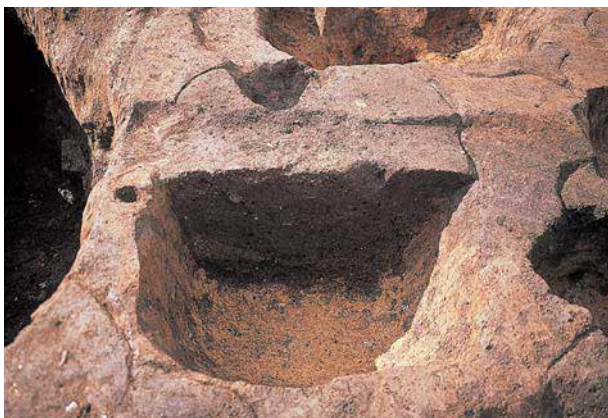
図版 6



(1) SK46 完掘状況 (西から)



(2) SK49 完掘状況 (北西から)



(3) SK52 土層 (北から)



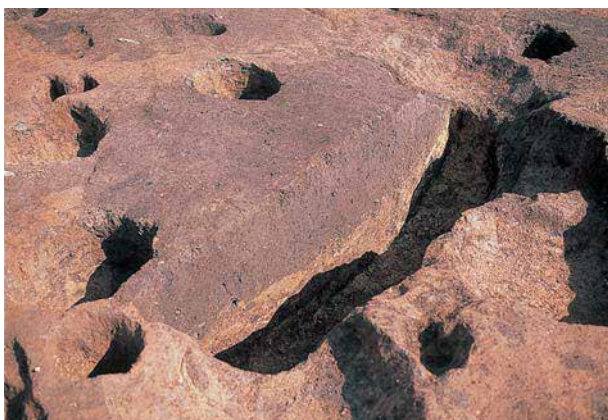
(4) SK52 完掘状況 (南から)



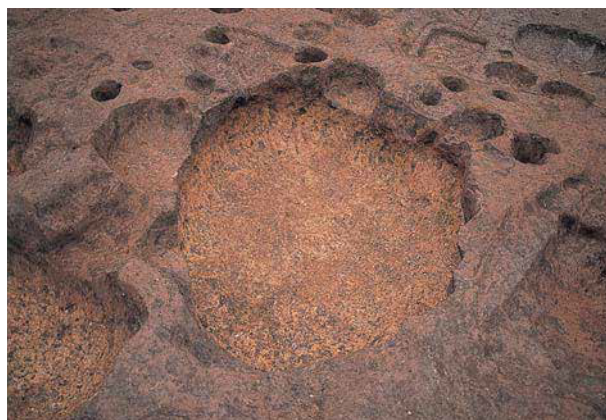
(5) SK53 土層 (北西から)



(6) SK53 完掘状況 (北東から)



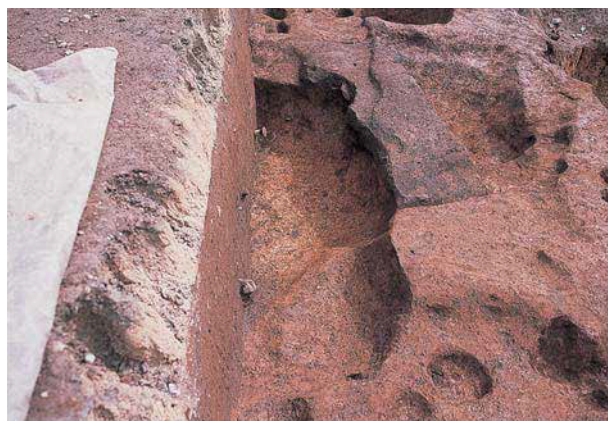
(7) SK54 土層 (南東から)



(8) SK54 完掘状況 (北東から)



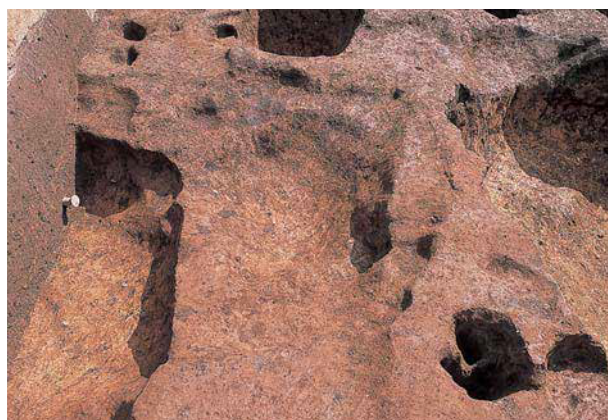
(1) S K56 土層 (南西から)



(2) S K56 完掘状況 (西から)



(3) S K57 土層 (南東から)



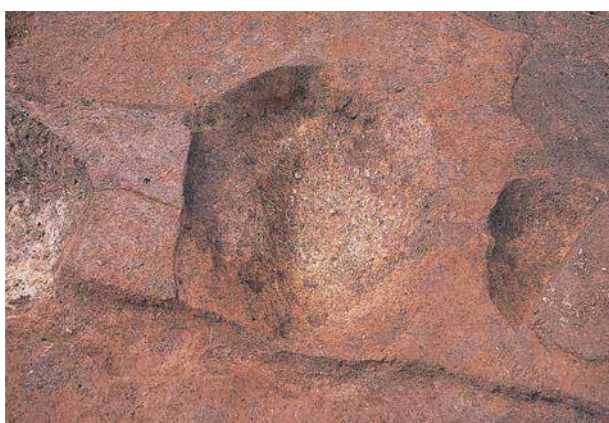
(4) S K57 完掘状況 (西から)



(5) S K60 土層 (北西から)



(6) S K60 完掘状況 (北西から)



(7) S K61 完掘状況 (東から)



(8) S K63 土層 (南から)

図版 8



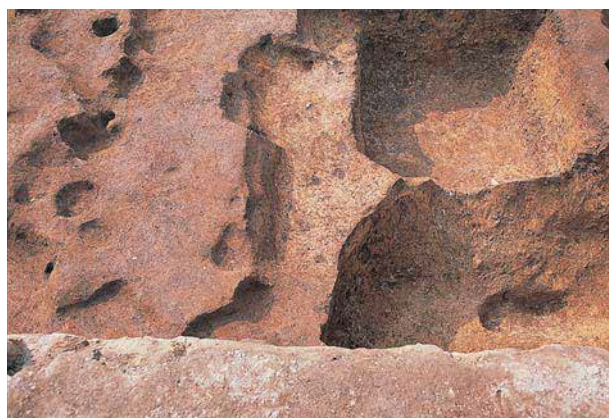
(1) S K63 完掘状況 (西から)



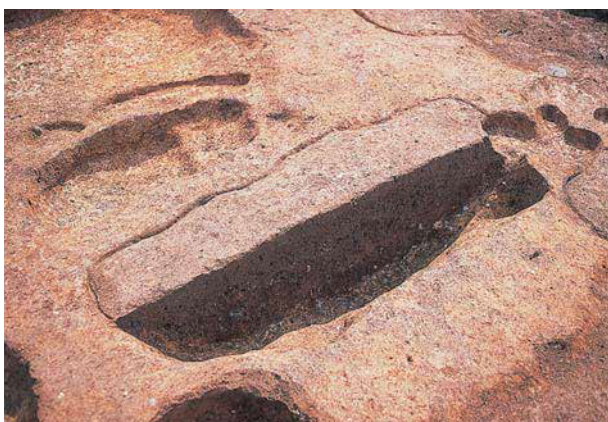
(2) S K64 土層 (南から)



(3) S K64 完掘状況 (東から)



(4) S K65 完掘状況 (北から)



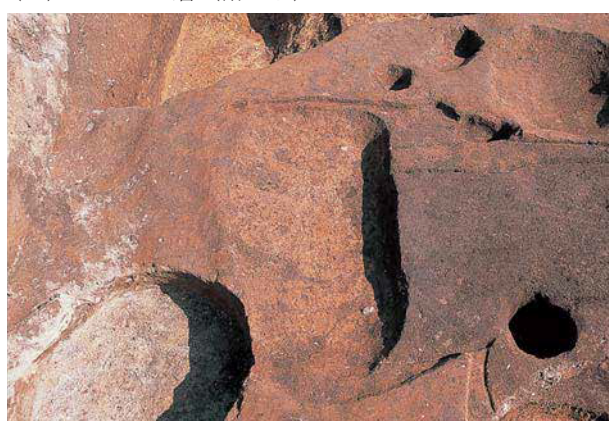
(5) S K75 土層 (西から)



(6) S K80 土層 (南から)



(7) S K80 完掘状況 (南から)



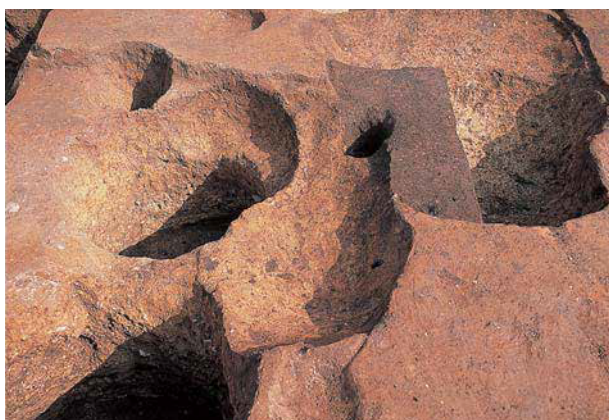
(8) S K81 完掘状況 (西から)



(1) S K82 完掘状況 (東から)



(2) S K83 完掘状況 (東から)



(3) S K84 完掘状況 (南から)



(4) S K85 土層 (北東から)



(5) S K85 完掘状況 (南西から)



(6) S K88 完掘状況 (西から)



(7) S K90 土層 (北東から)

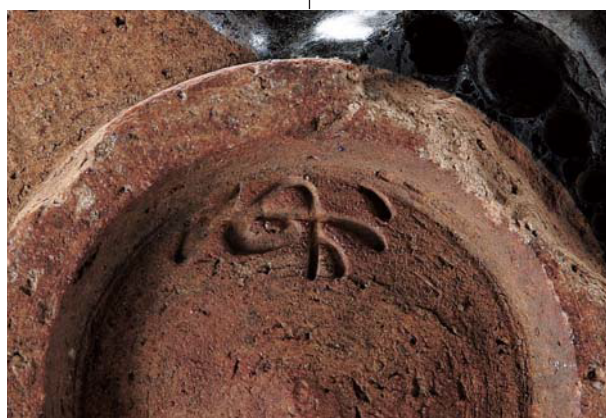
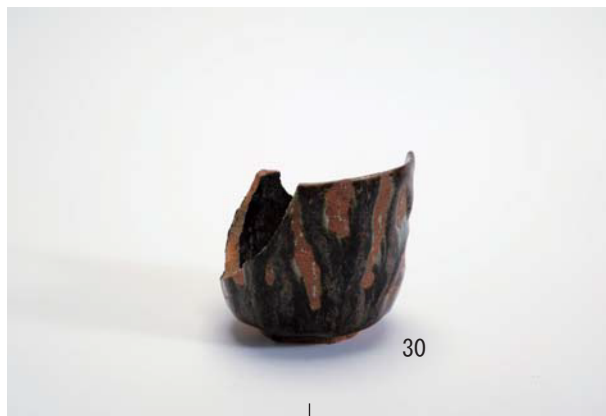


(8) S K90 完掘状況 (南東から)

図版 10

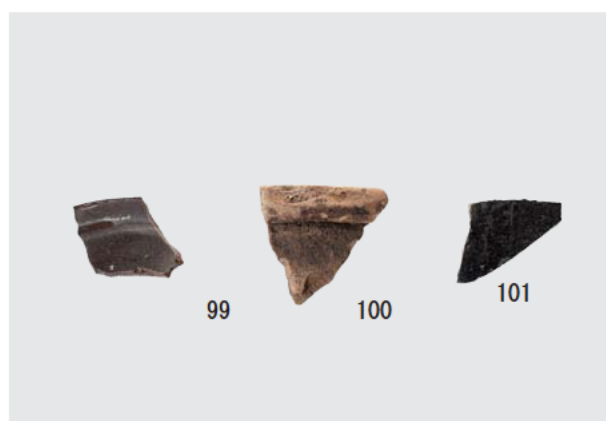


出土遺物①



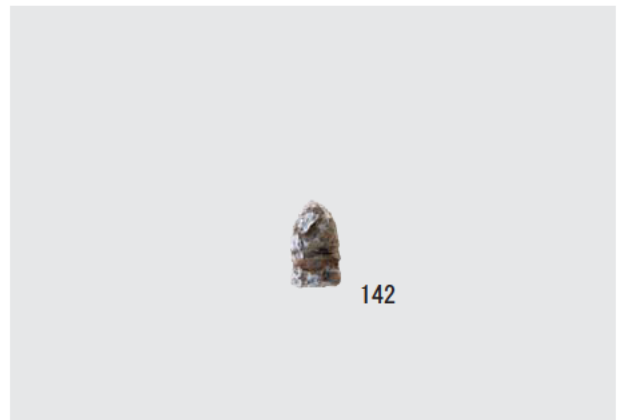
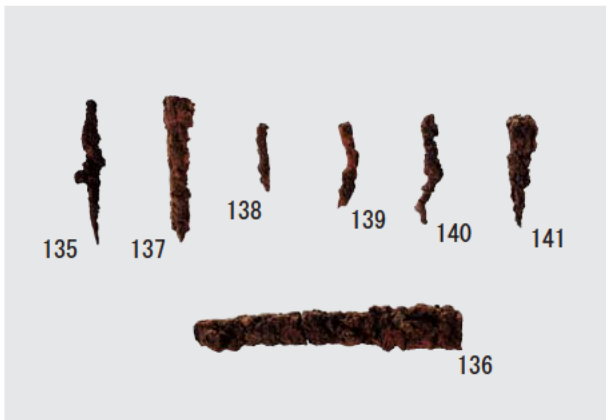
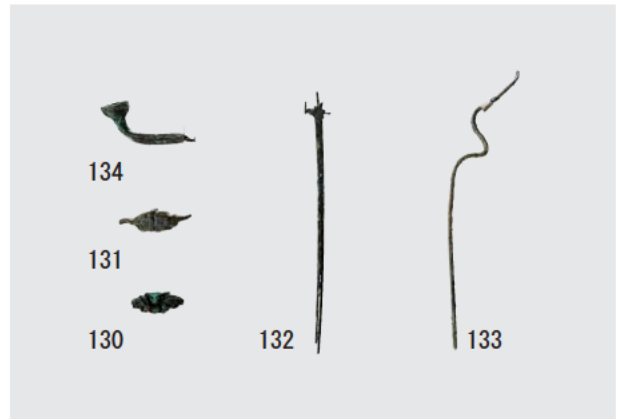
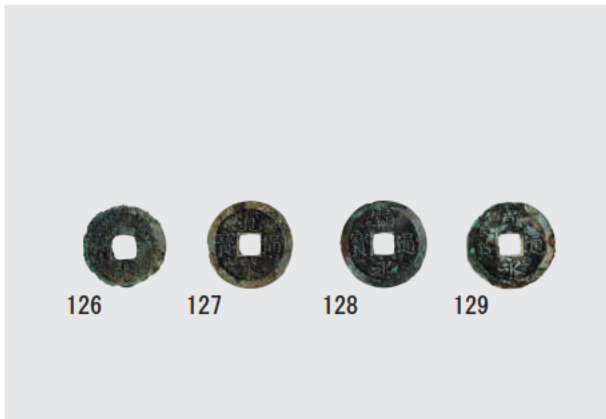
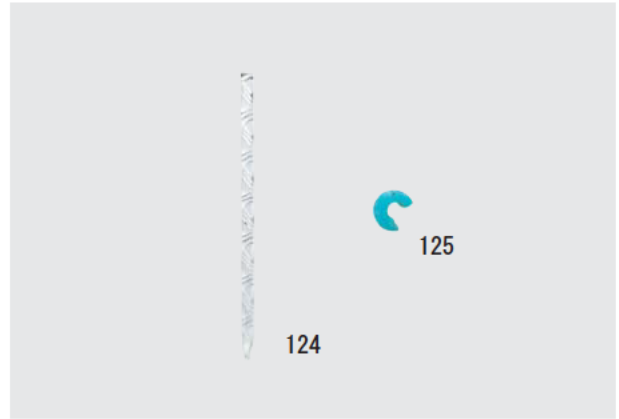
图版 12





图版 14





報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうじまさむらいやしきいせきだい10じちょうさ
書 名	庄島侍屋敷遺跡第10次調査
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第371集
編著者名	廣木 誠
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2016（平成28）年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじまさむらいやしきいせき 庄島侍屋敷遺跡 第10次調査	くるめししょうじまち 久留米市庄島町 17-54, -64, -65, -66	40203	031218	33 ° 18 ' 53 "	130 ° 30 ' 28 "	20151214 ～ 20160314	264 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
庄島侍屋敷遺跡 第10次調査	集落	近世	溝 井戸 土坑	2条 3基 37基	近世陶磁器、土師器、 土製品、石製品、ガラ ス製品、金属製品、 瓦、動物遺存体		江戸時代の武家屋敷跡の 調査で、9代藩主有馬頼 徳が創始した柳原焼の碗 が出土している。	
要 約								
調査地は、久留米城下の南方に設けられた庄島侍屋敷の東側中央付近に位置する。当該地は、絵図や古記録等によれば延寶五年（1677）以前は空閑地であり、延寶八年（1680）には大工長屋と木挽長屋を確認できる。また、天保年間（1830～1844）及び安政二年（1855）には再び空閑地となっており、明治二年（1868）には川野家が居を構えていた。検出した遺構は、17世紀代、17世紀末～18世紀前半、18世紀後半～19世紀前半、19世紀後半の4つに大別される。17世紀～18世紀前半頃の土地利用状況は判然としないが、19世紀前半頃は塵芥の処理場として利用されていた可能性がある。また、19世紀後半の遺構には川野家に関連すると思われる廃棄土坑を検出しており、廃棄土坑の1つからは柳原焼の碗が出土した。								
土木工事の届出日		平成27年10月19日			遺物の発見通知日		平成28年3月16日 (27文財第1658号)	

庄 島 侍 屋 敷 遺 跡
第10次発掘調査報告
久留米市文化財調査報告書 第371集
平成28年12月28日
発 行 久 留 米 市 教 育 委 員 会
編 集 久留米市 市民文化部 文化財保護課
印 刷 香和印刷株式会社